

宮古市埋蔵文化財調査報告書14
Archaeological Researches in Miyako

青猿 I 遺跡
下在家 II 遺跡
千徳城遺跡群(堀合館)

—昭和62年度発掘調査報告書—

1988.3

岩手県宮古市教育委員会
The Board of Education Miyako, Iwate Pre.



青猿 I 遺跡第 I 号鉄関連遺構区全体写真



青猿 I 遺跡第 I 号鉄関連遺構 竪穴～炉本体部

例 言

1. 本書は、青猿Ⅰ遺跡・下在家Ⅱ遺跡・千徳城遺跡群（堀合館）の昭和62（1987）年度の、発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、青猿Ⅰ遺跡 — （株）伊藤礦業所、下在家Ⅱ遺跡 — （株）東建ハウス、千徳城遺跡群（堀合館） — 善勝寺住職葛義人の委託を受け、岩手県宮古市教育委員会（教育長 小野寺聰）が主体となり、緊急発掘調査事業として実施した。
3. 発掘調査の期間及び担当者などは、本文中に記載した。
4. 調査座標は、各遺跡により異なるため、各遺跡の項に記した。
5. 高さは、標高値をそのまま使用した。
6. 土層観察に際しては、『新版標準土色帖』（1967小山正忠・竹原秀雄）を参考とした。
7. 下在家Ⅱ遺跡出土の貝類及び魚骨の種名については、現生標本などを利用し、高橋、盛合、鎌田が同定した。
8. 本書中第1・2図は、建設省国土地理院長の承認を得て、宮古市役所で発行した「宮古市全図（1：50000）」を参考にしたものである。
9. 各遺跡から出土した遺物、実測図、写真などは、すべて一括して宮古市教育委員会で保管管理を行なっている。
10. 本書の執筆は、青猿Ⅰ、下在家Ⅱは鎌田、千徳城遺跡群（堀合館）は高橋が担当し、編集には、高橋、盛合、鎌田の協議のもと、鎌田が行なった。
11. 発掘調査及び本書作成にあたり、次の方々からの御教示、御指導を頂き、記して感謝申し上げます。（敬称略）
 - 岩手県立博物館 高橋信雄 熊谷常正 赤沼英男
 - 岩手県埋蔵文化財センター 小田野哲憲 高橋与右ヱ門 高橋義介
 - 陸前高田市立博物館 佐藤正彦
 - 宮古市教育委員会 岸昌一 武田将男
 - 宮古市文化財保護審議委員 齊藤英樹
12. 本文中の引用文献の略称は次の通りとした。（すべて宮古市教育委員会刊行）
 - 『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』 小田野哲憲 1979→『大付報文79』
熊谷常正
 - 『宮古市遺跡分布調査報告書 1～4』 武田将男 1983～86→『分布調査 1～4』
 - 『宮古市遺跡分布図 昭和60年度版』 武田将男 1986→『分布図86』
 - 『崎山遺跡群Ⅰ—昭和61年度発掘調査概報—』 高橋憲太郎 1987→『崎山遺跡群Ⅰ』
13. SUMMARYの翻訳には、阿部豊、クリスティーヌ・シュルツの協力を得た。

序 文

宮古市は、東に悠久な太平洋を、西には雄大な北上山系を擁し、古来より、海・山・川の豊かな自然に恵まれてきました。この豊かな自然に支えられた私達は、長い歴史と豊潤な文化を培い育んできました。

宮古市内には、私達の先人達によって築き上げられ、守られてきた貴重な文化遺産である、約400ヶ所余りもの遺跡が、確認されています。中には、幾千年も前の縄文時代の鍬ヶ崎館山貝塚や、崎山貝塚などの貝塚群、弥生時代の上村遺跡、平安時代の集落跡であった磯鶏館山遺跡、中世の城館跡である千徳城跡など、当時の人達の生活を知る上では重要な遺跡群の他、いまだに解明されず、土中深く埋もれている貴重な遺跡がたくさんあります。

しかしながら、近年、社会生活の高度化に伴ない、現代社会の必然的な要請として、各種の開発事業が多く策定され、実施されています。私達の宮古市においても、地域活性化のもと、宅地造成や、港湾整備や公共事業などの急激な都市化を迎えています。

この様な社会的状況において、古来から守り継がれてきた多くの文化遺産、なかでも埋蔵文化財は、種々の開発事業と関連し、消滅の危機にさらされています。今日の社会に生活している私達には、永きにわたり保存され、受け継がれてきた貴重な文化遺産を、正しい理解と共に保護し、活用し後世に伝える責任と義務があります。

宮古市教育委員会では、文化財保護と愛護の推進の立場から、基礎的データの収集として、昭和57年度から昭和60年度にかけて、市内の遺跡分布調査事業、そして、昭和61年度からは、遺跡の内容把握と保存のための資料収集を目的とし、5ヶ年計画で崎山遺跡群の発掘調査事業や各種開発事業に先だつ、発掘調査事業を実施してきました。

本書は、宅地開発及び、墓地拡張に伴ない、止むなく消滅することとなりました青猿I遺跡、下在家II遺跡、千徳城遺跡群（堀合館）の発掘調査の内容をまとめたものであり、数多くの貴重な資料を得ることができました。

本書が研究者のみならず、文化財保護と愛護、ならびに郷土文化の理解のために広く、多くの皆様方に活用されることを願うものです。

最後に、調査に際し、多大なる御援助、御協力を賜りました、(株)伊藤礦業所、(株)東建ハウス、善勝寺住職葛義人氏、実際に調査に従事していただきました、市民の皆様をはじめとする方々に対し、厚く御礼申し上げ序文といたします。

昭和63年3月

宮古市教育委員会

教育長 小野寺 聰

目 次

序 文	
例 言	
目 次	
I 調査経過	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査体制	2
II 遺跡をとりまく環境	
1. 宮古市内の遺跡について	3
2. 宮古市内の地形・地質について	6
III 青猿Ⅰ遺跡	
1. 青猿Ⅰ遺跡の立地と環境	7
2. 青猿Ⅰ遺跡の調査経過と概要	7
2-1(1) 調査の経過及び方法	7
2-1(2) 調査の概要	8
3. 青猿Ⅰ遺跡から検出した遺構・遺物	8
3-1(1) 調査区B・F区の土層断面観察	8
3-1(2) 調査区G区について	8
3-1(3) 竪穴住居跡	15
3-1(4) 鉄関連遺構	18
3-1(5) 土壇跡	22
4. 調査のまとめ	24
IV 下在家Ⅱ遺跡	
1. 下在家Ⅱ遺跡の立地と環境	25
2. 下在家Ⅱ遺跡の調査経過と概要	25
2-1(1) 調査の経過及び方法	25
2-1(2) 調査の概要	27
2-1(3) 出土遺物	27
3. 下在家Ⅱ遺跡から検出した遺構・遺物	31
3-1(1) 土壇跡	31
3-1(2) 貝ブロック	35
4. 調査のまとめ	40

V 千徳城遺跡群（堀合館）	
1. 千徳城遺跡群について	41
2. 調査の経過と概要	41
2-1 調査の経過及び方法	41
2-2 調査の概要	41
3. 検出遺構と遺物	42
3-1 検出遺構	42
3-2 検出遺物	
4. 調査のまとめ	48
SUMMARY	49

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図(1:150000).....	4
第2図	宮古市内の地形分類図(1:150000).....	5
第3図	青猿Ⅰ遺跡と周辺地形図(1:5000).....	9・10
第4図	青猿Ⅰ遺跡調査区位置図(1:1000).....	11・12
第5図	青猿Ⅰ遺跡調査区全体図(1:200).....	13
第6図	青猿Ⅰ遺跡B区トレンチ断面図(1:40).....	13
第7図	青猿Ⅰ遺跡G区全体図及び断面図(1:100).....	14
第8図	青猿Ⅰ遺跡第1号竪穴住居跡全体図(1:40).....	16
第9図	青猿Ⅰ遺跡第1号竪穴住居跡カマド(1:20).....	17
第10図	青猿Ⅰ遺跡第1号竪穴住居跡出土遺物実測図(1:3).....	17
第11図	青猿Ⅰ遺跡第1号鉄関連遺構全体図(1:40).....	19
第12図	青猿Ⅰ遺跡第1号鉄関連遺構(炉本体部)(1:15).....	20
第13図	青猿Ⅰ遺跡第1号鉄関連遺構区出土遺物(1:3).....	21
第14図	青猿Ⅰ遺跡土壌跡(1:40).....	23
第15図	下在家Ⅱ遺跡と周辺地形図(1:5000).....	26
第16図	下在家Ⅱ遺跡出土遺物(1:2).....	27
第17図	下在家Ⅱ遺跡調査区位置図(1:1000).....	28
第18図	下在家Ⅱ遺跡調査区全体図(1:200).....	29・30
第19図	下在家Ⅱ遺跡第1号～第4号土壌跡(1:40).....	32
第20図	下在家Ⅱ遺跡第5号土壌跡(1:40).....	33・34
第21図	下在家Ⅱ遺跡貝ブロック出土釣針(2:3).....	36
第22図	下在家Ⅱ遺跡貝ブロック全体図(1:30).....	37
第23図	千徳城遺跡群(堀合館)調査区全体図(1:200).....	42
第24図	千徳城遺跡群と周辺地形図(1:5000).....	43・44
第25図	千徳城遺跡群(堀合館)第1号段状遺構・第2号段状遺構・第3号土壌跡平面図(1:100).....	45
第26図	千徳城遺跡群(堀合館)土層断面図①(1:100).....	46
第27図	千徳城遺跡群(堀合館)土層断面図②(1:100).....	47

写真図版目次

- 第1図版 長根・泉町・鴨崎遺跡群垂直写真，青猿Ⅰ遺跡全景垂直写真
- 第2図版 青猿Ⅰ遺跡近景，青猿Ⅰ遺跡調査区（D区）
- 第3図版 青猿Ⅰ遺跡調査区（A区），青猿Ⅰ遺跡調査区（B区）
- 第4図版 青猿Ⅰ遺跡調査区（G区），青猿Ⅰ遺跡調査区（G区）
- 第5図版 青猿Ⅰ遺跡竪穴住居跡土層断面①，青猿Ⅰ遺跡竪穴住居跡土層断面②
- 第6図版 青猿Ⅰ遺跡竪穴住居跡カマド①，青猿Ⅰ遺跡竪穴住居跡カマド②
- 第7図版 青猿Ⅰ遺跡竪穴住居跡カマド③，青猿Ⅰ遺跡竪穴住居跡
- 第8図版 青猿Ⅰ遺跡第1号～第4号土壌跡
- 第9図版 青猿Ⅰ遺跡鉄関連遺構全景，青猿Ⅰ遺跡鉄関連遺構（竪穴～炉本体）
- 第10図版 青猿Ⅰ遺跡鉄関連遺構（竪穴～炉本体），青猿Ⅰ遺跡鉄関連遺構（炉本体）
- 第11図版 青猿Ⅰ遺跡鉄関連遺構（竪穴～炉本体～廃滓捨て場），青猿Ⅰ遺跡鉄関連遺構（竪穴～炉本体）
- 第12図版 青猿Ⅰ遺跡鉄関連遺構炉本体内出土鉄滓（碗型滓），青猿Ⅰ遺跡鉄関連遺構廃滓捨て場出土羽口
- 第13図版 崎山遺跡群全景，下在家Ⅱ遺跡近景
- 第14図版 下在家Ⅱ遺跡調査区①，下在家Ⅱ遺跡調査区②
- 第15図版 下在家Ⅱ遺跡第5号土壌跡土層断面①，下在家Ⅱ遺跡第5号土 跡土層断面②
- 第16図版 下在家Ⅱ遺跡貝ブロック断面①，下在家Ⅱ遺跡貝ブロック断面②
- 第17図版 下在家Ⅱ遺跡貝ブロック①，下在家Ⅱ遺跡貝ブロック②
- 第18図版 下在家Ⅱ遺跡出土遺物
- 第19図版 千徳城遺跡群（堀合館）調査区全景，遺構全景
- 第20図版 千徳城遺跡群（堀合館）第1号段状遺構・第2号段状遺構・第3号土壌跡堆積状況
- 第21図版 千徳城遺跡群（堀合館）第2号段状遺構構築土堆積状況，ウシ下顎骨出土状況
- 第22図版 千徳城遺跡群（堀合館）獣骨出土状況
- 第23図版 千徳城遺跡群（堀合館）出土遺物

付 表 目 次

第1表 軟体・節足・棘皮動物出土数一覧表	38
第2表 エゾアワビ最大殻長分布数表	39
第3表 ムラサキインコガイ最大長分布数表	39
第4表 魚骨出土数表	39

I 調査経過

1. 調査に至る経過

宮古市では近年、比較的大規模な宅地開発をはじめとする開発の波が押し寄せて来ている。それに伴ない、埋蔵文化財包蔵地との競合が顕著となり、教育委員会と、開発側の事前の協議件数、または、調査依頼の申請数もかなりの数に昇っている。その結果、開発側との事前協議において、設計変更などによる遺跡の保護、保存が不回避と判断された遺跡については、開発側の理解と協力のもとに、宮古市教育委員会が主体となり、緊急発掘調査を実施してきた。

事前協議

緊急発掘調査

青猿Ⅰ遺跡

青猿Ⅰ遺跡は、宮古市大字千徳第3地割青猿地内に所在し、宮古市遺跡コードL G 33-0220 遺跡番号Se-11として登録されている。昭和59年8月、(株)伊藤礦業所より当遺跡を包蔵する、宮古市大字千徳第3地割青猿13番1他6筆に対し、土砂採集及びその後、宅地として開発したいという届出書が提出された。しかし、宮古市教育委員会では、当時、大規模な緊急発掘調査事業を、継続中であったため、実際に両者間の具体的な事前協議に入ったのは、昭和62年度になってからである。昭和62年4月の試掘調査の結果、遺構の存在する事が確認され、再度協議を行なった結果、遺構密度の高いD区については、現状保存という事で開発対象区からはずし、遺構密度の比較的薄いA～C区、E～G区について、記録保存を前提とした緊急発掘調査を実施する事で、両者間で協定書を締結し、調査を開始した。

青猿Ⅰ遺跡

下在家Ⅱ遺跡

下在家Ⅱ遺跡は、宮古市崎嶽ヶ崎字下在家地区に所在する。当遺跡を含む尾根部南下の畑地などに、土器片の散布が見られる事と地形などの立地条件から遺跡として登録されたものである。昭和60年8月、(株)東建ハウスより当地区一帯を切り盛りし、宅地として開発・分譲したいという届出がなされた。これを受けて宮古市教育委員会は、協議を行なった結果、記録保存を前提として、緊急発掘調査を実施する事として昭和62年6月27日付で委託契約書を締結し調査を開始した。

下在家Ⅱ遺跡

千徳城遺跡群(堀合館)

千徳城遺跡群は、宮古市大字千徳地内に所在し、宮古市遺跡コードL G 33-0197として登録されている。昭和61年に善勝寺住職葛義人より堀合館北東部の墓地を増設したいという届出がなされた。これを受けて宮古市教育委員会は、協議を行なった結果、記録保存を前提として昭和62年6月22日より緊急発掘調査を実施した。

堀合館

2. 調査体制

各遺跡の発掘調査は、いずれも宮古市教育委員会が、各遺跡の発掘調査委託者の協力のもとに行なった。調査の体制は次のとおりである。

体 制	調査主体	宮古市教育委員会	教育長	小野寺聰
	調査総括	北山 浩	宮古市教育委員会社会教育課長	
		佐々木孝夫	〃	社会教育係長
	調査員	高橋憲太郎	〃	社会教育係主事（千徳城遺跡群(堀合館)担当)
	盛合 義信	〃	〃	
	鎌田 祐二	〃	埋蔵文化財調査員（青猿Ⅰ・下在家Ⅱ担当）	

各遺跡の調査にあたり、次の各位から多大なる御協力を頂いた。

青猿Ⅰ遺跡

青猿Ⅰ遺跡 調査期間 昭和62年4月13日～同年6月27日

調査協力 (株)伊藤礦業所 代表取締役 塚田嘉則

〈発掘調査〉 阿部豊 刈屋昭三 佐伯裕則 佐々木茂 竹田末人 大棒一枝
田崎昭吾 永井義雄 成ヶ沢英一郎 藤谷晶子 古館友三 前川友宏
村岡憲一 吉田 昭

〈整理作業〉 佐々木ヨシ子 北村由美子

下在家Ⅱ遺跡

下在家Ⅱ遺跡 調査期間 昭和62年6月29日～同年8月12日

調査協力 (株)東建ハウス 代表取締役 渡邊聰

地 権 者 千崎常男

〈発掘調査〉 阿部豊 刈屋昭三 神林信吉 菊池清八 木村博 佐伯裕則 佐々木茂
竹田末人 大棒一枝 田崎昭吾 永井義雄 成ヶ沢英一郎 藤谷晶子
古館友三 前川友宏 村岡憲一 水本正男 山内専太郎 吉田昭

〈整理作業〉 佐々木ヨシ子 北村由美子

千徳城遺跡群 (堀合館)

千徳城遺跡群(堀合館) 調査期間 昭和62年6月22日～昭和62年7月21日

調査協力 善勝寺住職 葛義人

〈発掘調査〉 阿部豊 刈屋昭三 佐伯裕則 竹田末人 大棒一枝 田崎昭吾 永井義雄
成ヶ沢英一郎 古館友三 前川友宏 吉田昭

〈整理作業〉 佐々木ヨシ子

II 遺跡をとりまく環境

1. 宮古市内の遺跡について（第1図）

青猿Ⅰ・下在家Ⅱ・千徳城遺跡群（堀合館）の各遺跡をとりまく環境については、各々の遺跡の項に記述する事とし、ここでは、宮古市内全域について概観する。

宮古市は、岩手県沿岸部のほぼ中央部、北緯39° 29' 49" ～ 39° 43' 23"、東経141° 45' 20" ～ 142° 04' 44" までを市域とし、総面積338.38km²をはかり、本州最東端に位置する。

宮古市では、昭和57年度から4ヶ年にわたり、市内の遺跡詳細分布調査を実施した。その結果約400ヶ所の遺跡が確認され、『分布調査1～4』及び『分布図86』として刊行されている。それによって市内の遺跡分布状況を見れば、大きくいくつかのまとまりが見られる。即ち、海岸沿いを北からみれば、市内北部海岸沿いの丘陵（小本丘陵）には、獣・魚・貝類などの自然遺物を包蔵する^{ひがし}嶽ヶ崎館山貝塚、^{さか}崎山貝塚や人骨を出土した大付遺跡、今年度調査を実施した下在家Ⅱ遺跡など、縄文時代の遺跡・貝塚が集中する「女遊所・崎山遺跡群」。八木沢川流域の丘陵（八木沢丘陵）には、磯鶏蝦夷森・上村・小沢田の縄文時代の貝塚、平安時代の集落が発掘調査された磯鶏館山遺跡など、奈良・平安時代の遺跡が集中する「藤原・八木沢・磯鶏遺跡群」。津軽石川の河口付近を中心とし、宮古湾湾頭部をU字状に囲む丘陵（豊間根丘陵）には、奈良時代の竪穴住居跡が確認された^{あし}沼里遺跡、平安時代の竪穴住居跡が調査された赤前遺跡、鉄関連遺構が検出された根井沢遺跡、15～16世紀のほぼ完形の天目茶碗2個を出土した金浜館跡などの遺跡が分布し、宮古湾頭の東岸に「高浜・金浜遺跡群」、中央部に「津軽石・根井沢遺跡群」、西岸に「赤前遺跡群」が形成されている。

内陸部に目を向けると、閉伊川の流域沿いに丘陵（千徳丘陵）が存在し、遺跡が集中分布する。この丘陵は閉伊川により、南と北に大きく2分されており、南側には、松山館から出土した蕨手刀に代表される、鉄に関する資料が多く出土する「^{おん}隠里遺跡群」。北側には、奈良時代の住居跡が調査された泉町狐崎Ⅱ遺跡や、今年度調査を実施した青猿Ⅰ遺跡など、「長根・泉町・鴨崎遺跡群」。14世紀末頃築城された千徳城に代表される城館跡が集中する「千徳城遺跡群」が形成されている。その他、閉伊川支流の長沢川、近内川、山口川、北城の田代川などの各河川沿いに遺跡は分布する。

次に、東部の重茂半島部に目を向ければ、そのほとんどが大・中起伏の地形のためか、遺跡は小河川によって形成された平坦部・緩斜面上に立地し、重茂川流域に縄文時代の遺跡や重茂館跡が分布する「重茂遺跡群」。千鶏川や石浜沢流域には、昭和62年度に実施された発掘調査により縄文時代前期初頭の大集落跡として確認された、千鶏Ⅱ遺跡などを含む「千鶏・石浜遺跡群」が形成されている。

近年、宮古市においても、大規模開発や民間企業主体の宅地開発などが急増し、緊急発掘調査が相次ぎ、次々と貴重な発見、資料の収集がなされてきている。とかく岩手県内陸部に比して資料の体系的な蓄積が遅れがちである。今後は、更に増大するであろう資料を、宮古市内のみならず、岩手県沿岸部の資料として他市町村との連携を図る必要があるものと考えられる。

位 置

詳細分布調査

女遊戸・崎山遺跡群

藤原・八木沢・磯鶏遺跡群

宮古湾湾頭部の遺跡群

隠里遺跡群

長根・泉町・岬崎遺跡群

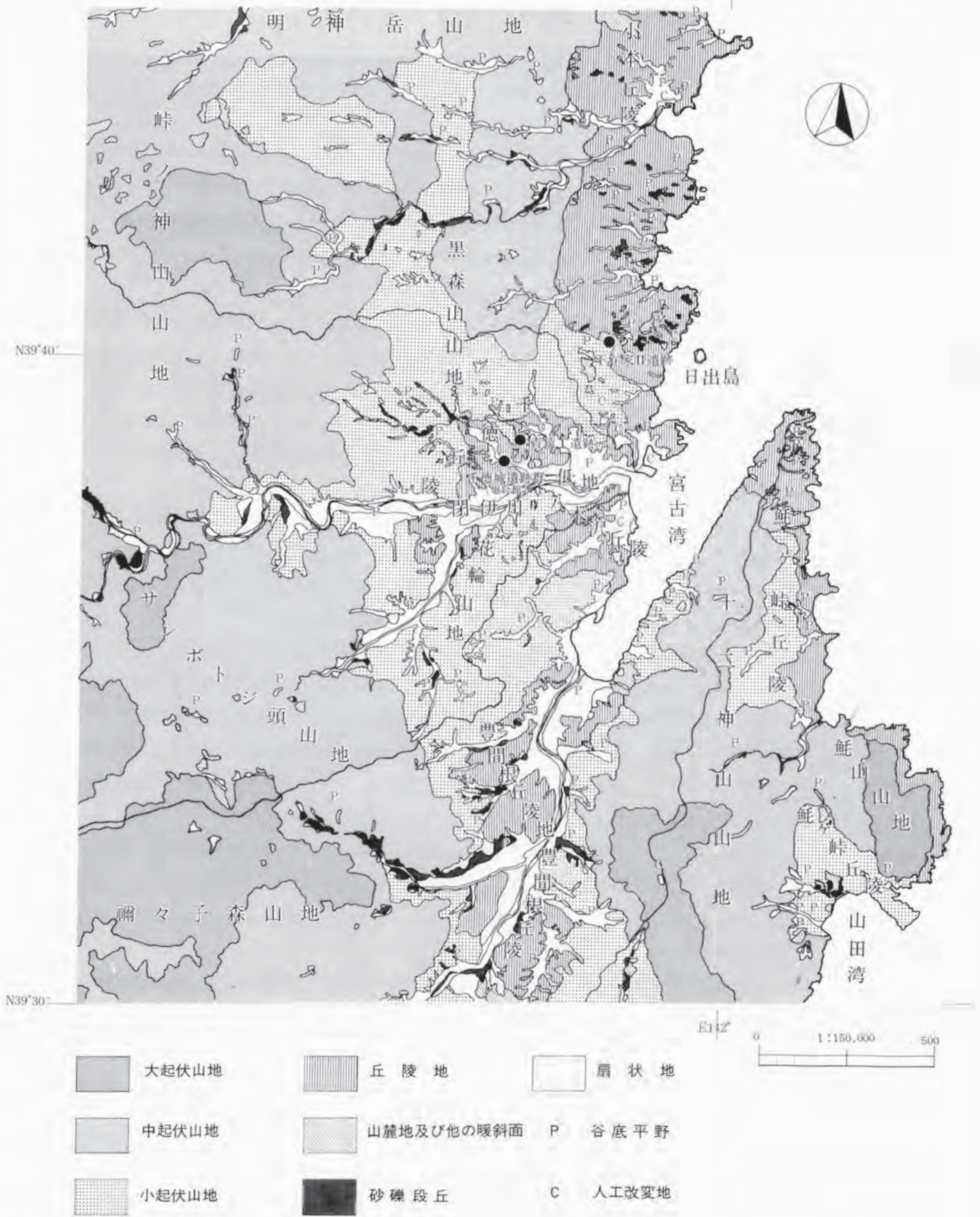
千徳城遺跡群

重茂遺跡群

千鶏・石浜遺跡群



第1図 位置図



第2図 地形分類図

2. 宮古市内の地形・地質について（第2図）

宮古市は、リアス式海岸で有名な三陸海岸国立公園のほぼ中央部に所在し、当市を境に北部は隆起性、南部は沈降性の海岸線を形成し、地形的にも地質的にも、北と南の境をなす地域となっている。

地 形

津軽石断層帯

地形的には、津軽石川から宮古湾の西縁沿いを北北東～南南西に走向する、津軽石断層帯を境に、西部の北上山地から続く、中・小起伏の山地帯及び、その縁辺部に形成された丘陵帯と、東部の重茂半島域と大きく2分され、更に、西から東へ流れる閉伊川、南から北へ流れる津軽石川の河口及び、その各支流域に形成された平坦部（河岸段丘、谷底平野など）に分けられる。

西部山地帯

西部の山地帯は、北上山地の東縁部にあたり、海岸部に向かい、その高度を徐々に下げ標高200mの等高線付近で小起伏となる。この小起伏帯を取りまくように、標高100m前後の丘陵地帯が形成され、小本・千徳・八木沢・豊間根の各丘陵に分けられている。小本丘陵は、宮古湾から北方の海岸部に存在するものだが、地形形態上は丘陵であるが、その形成・発達上からは海岸段丘に相当するものである。また、各丘陵はいずれも面積的には小さく、開析度が高いため、その平面形態は樹枝状を呈し、複雑に入り組んだものとなっている。

重茂半島

東部の重茂半島域は、その大部分が標高200m以上の山地帯で構成されており、その縁辺部に、海岸線に沿うように丘陵が形成されている。この丘陵は、鯨ヶ崎丘陵と呼ばれているが、そのまま海へ落ち込んでいるため、低地及び平坦部の形成状況は著しく悪い。わずかに、小河川によって形成された段丘や谷底平野が、散在的に見られるだけである。

中央部平坦地

中央部の平坦地は、おもに閉伊川・津軽石川及び、その各支流によって形成されたもので、河岸段丘及び、谷底平野・氾濫平野に分けられる。河岸段丘は、各河川の流域にみられるものだが、その規模も極く狭く、面的にも、ほとんど連続性をもたず、現河道へ大きく傾斜している場合が多い。また、河床からの比高によってⅠ～Ⅲ段に分類できるが、上位のものが洪積世のものとは限らない。谷底平野及び氾濫平野は、閉伊川・津軽石川河口付近で大きく発達しており、現市街地が形成されている。

地 質

地質的に見れば、西部山地帯及び、その縁辺部の丘陵帯は、北上山地北部型古生層（豊間根層・花輪層・蝨目層）及び中生代に進入した花崗岩（宮古花崗岩体）が、その基盤をなしているが、市北部の小本丘陵は、中生代の安山岩質岩石（原地山層）及び、これに進入した花崗岩（田老花崗岩体）によって構成されている。

東部の重茂半島域は、中生代白亜紀に宮古花崗岩体が進入する前の火山活動により、噴出した火山砕屑岩（重茂噴出岩類）及び、宮古花崗岩体進入後に貫入した花崗斑岩などにより、構成されている。

各河川流域に形成された段丘は、大部分は砂礫を堆積物としたもので、礫層の厚さは、数メートルの砂礫段丘である。

〈参考・引用文献〉 『宮古の自然』 宮古市 1980年

『土地分類基本調査「宮古・鯨ヶ崎」』 岩手県企画開発室 1974年

III 青猿 I 遺跡

1. 青猿 I 遺跡の立地と環境

青猿 I 遺跡は、岩手県宮古市大字千徳第 3 地割青猿地内に所在し、千徳丘陵（II 遺跡をとりまく環境を参照）上に立地し、標高50～60mをはかる。

千徳丘陵
立地

千徳丘陵は、閉伊川により南北に分断され、更に、当遺跡を含む北側の丘陵は、山口川、近内川などにより3分される。当遺跡は其中でも、半島状に突き出た中央部の丘陵上に立地し北は山口川、西南から東は近内川及び閉伊川旧河道による氾濫平野が広がる。当遺跡は標高50～60m（氾濫平野からの比高差40～50m）くらいの尾根上や緩斜面上に立地する多くの遺跡の集まりである、長町・泉町・鴨崎遺跡群の中、一番西側に位置し、背後には西部山地帯から続く、小起伏山地（黒森山地）が迫っている。この遺跡群には、現在18ヶ所の遺跡が存在するが、奈良～平安時代にかけてのものが多く、Iz-04 泉町狐崎II遺跡は、1981（昭和56）年度に緊急発掘調査が実施され、尾根上に奈良時代の竪穴住居跡及び、縄文時代後期の遺物包含層を検出している。また、当遺跡と洞状の谷部を挟んだ尾根上に立地するSe-09青猿II遺跡は、1984（昭和59）年度に実施された緊急発掘調査で、平安時代の土壌・竪穴・竪穴住居跡、及び弥生時代の遺物包含層が検出されている。Se-01は、南北朝時代初期（14世紀前半）に閉伊川余市員連によって創建されたといわれる笠間館跡である。

環境

2. 青猿 I 遺跡の調査経過と概要

2-1) 調査の経過及び方法

調査は、既述の調査に至る経過で記述した通りの経過で開始された。調査は、試掘調査により遺構密度の高かったD区（第4図参照）を現状保存するという開発計画の変更に伴ない、途中約10日間の期間を空けたが、6月27日には終了した。

調査の方法は、調査対象区のうち、遺構・遺物の存在が皆無と考えられる急斜面、及び現代に削平され畑地の一部となっている所を除き、尾根部分は表土を全面的に剥ぎ、遺構の有無を確認した。また、洞状の緩斜面となっているB区（第4図参照）については、その堆積土が相当厚いものと考えられたため、5m巾のトレンチを設定し、遺構が確認できる面まで下げ、一部1m巾で深掘りをして、その堆積土の状況を記録にとどめた。

調査方法

調査座標は、現場作業において、調査地形にあわせて境界杭2点を見通して作った任意の座標を設定し、調査にあたった。座標軸は、磁北より約16° 80′ 東へ傾いている。

なお、現状保存となったD区については、試掘調査終了後、埋め戻し作業を実施した。

2-② 調査の概要

今回の調査では、試掘調査後に埋め戻しを行ない、検出しただけの遺構も含め、検出した遺構遺物は次のとおりである。

〈検出遺構〉 竪穴住居跡、もしくは竪穴住居跡と想定できるもの5棟（うち、本精査を実施したのは、1棟（平安時代）だけで、他は検出だけし埋め戻したが、いずれも平安期のもものと推定される。）

土壇跡9基（うち、4基は陥し穴状の遺構、1基は平安時代の浅い皿状の円形土壇として精査し、他の4基については埋め戻した。）

鉄関連遺構1基

〈検出遺物〉 縄文時代の土器片（数量的には少ないが、試掘調査の段階で埋め戻しを行なったD区内で出土した。）

平安時代の土師器（精査を実施した平安時代の竪穴住居跡のカマド跡付近から出土したもの）

鉄滓及び羽口片等（鉄関連遺構及び、近くに廃棄ブロックとして多量に出土した。）

3. 青猿 I 遺跡から検出した遺構・遺物（第4図～第14図 図版2～図版12）

3-① 調査区B・F区の土層断面観察（第6図，図版3）

調査区B・F区は、洞状の谷部でその堆積土が厚く、下半部は地山面までは至らなかった。

第I層 表土層。Ia層は腐葉土層である。

第II層 表土層下の暗褐色土層。

第III層 黒褐色土層。量的には少ないが、土師器片を含む。F区では、鉄関連遺構を検出した層で、竪穴住居跡もこの層に伴うものと考えられる。

第IV層 地山漸移層もしくは、地山ブロックを多く含む層。

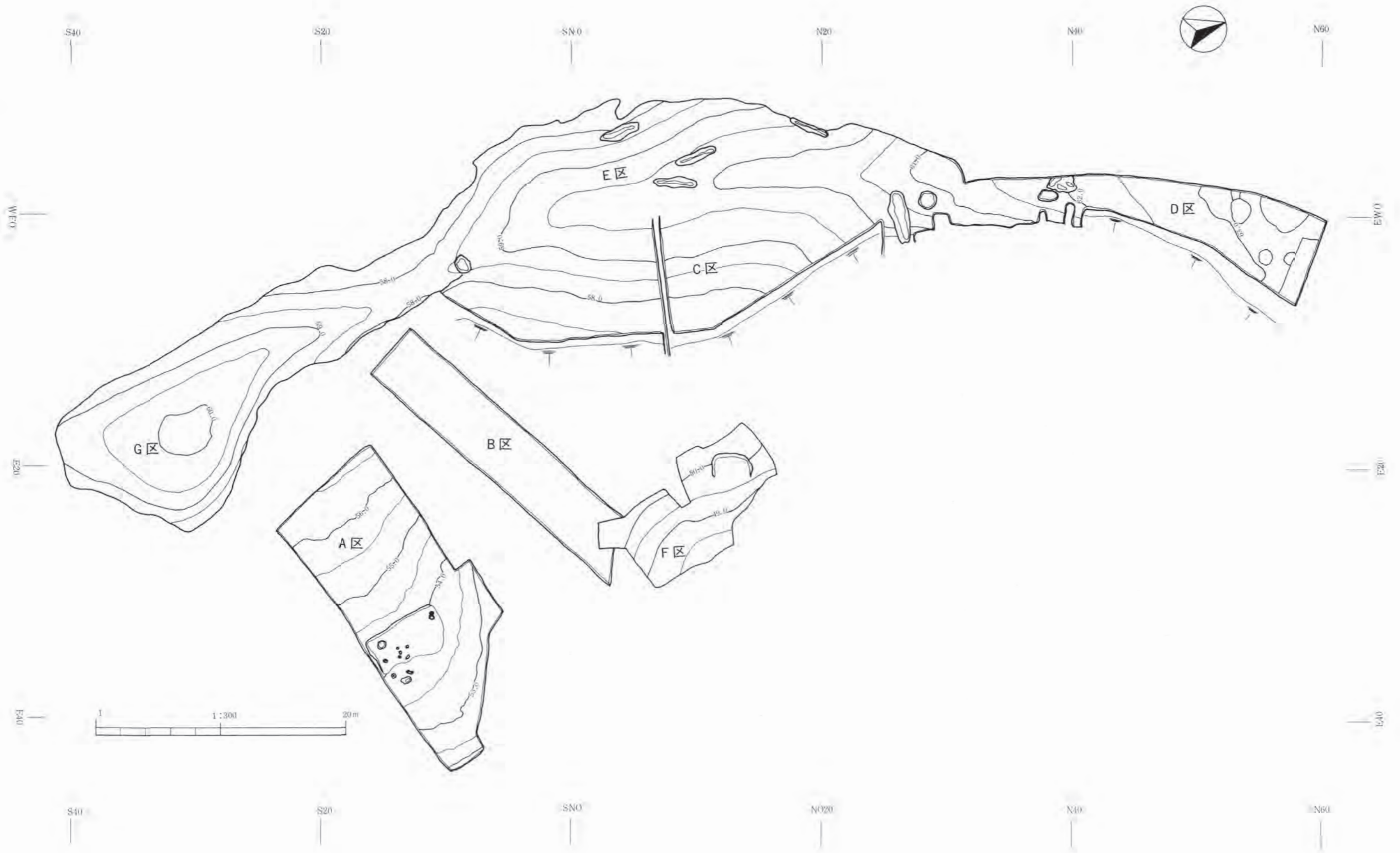
遺物は、I・II層からは近現代の陶磁片、III層からは、土師器片が若干出土しているだけである。

3 (2) 調査区G区について（第7図，図版4）

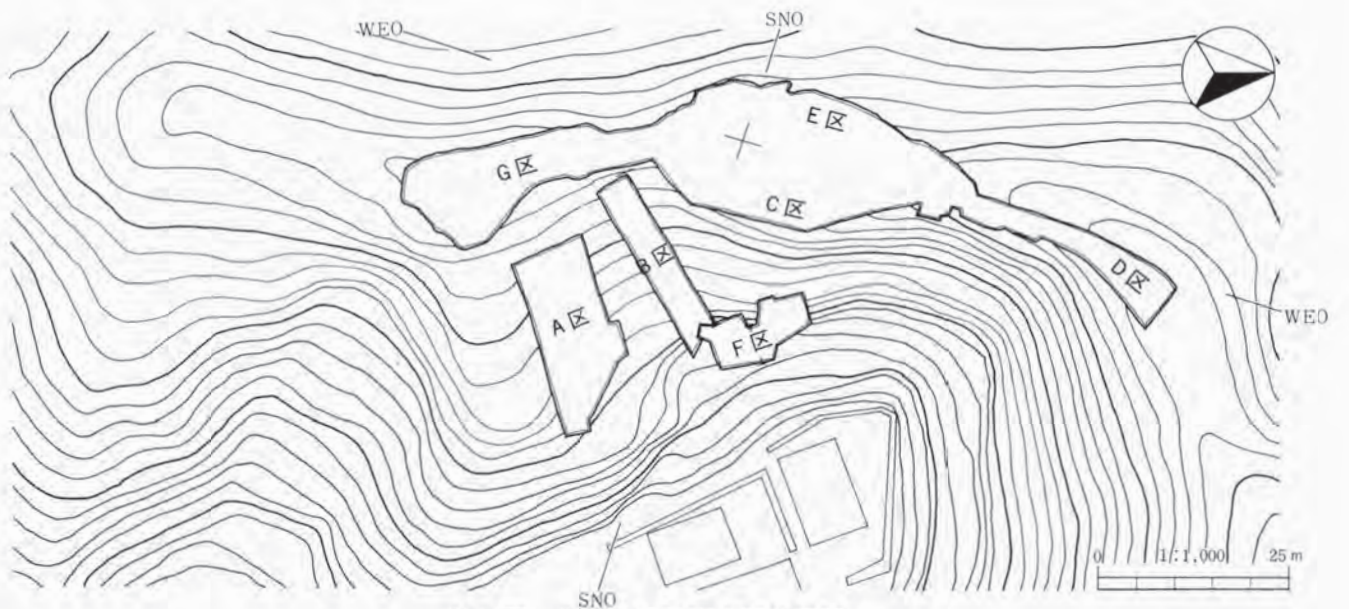
調査区内では、一番標高が高く塚状になっており、多量の礫（大～小）がみられた。深さ0.7m程で基盤の花崗岩体になり、遺構は検出しなかった。これは、砂礫段丘（洪積世？）の一部が開析されずに残存していたものと考えられる。



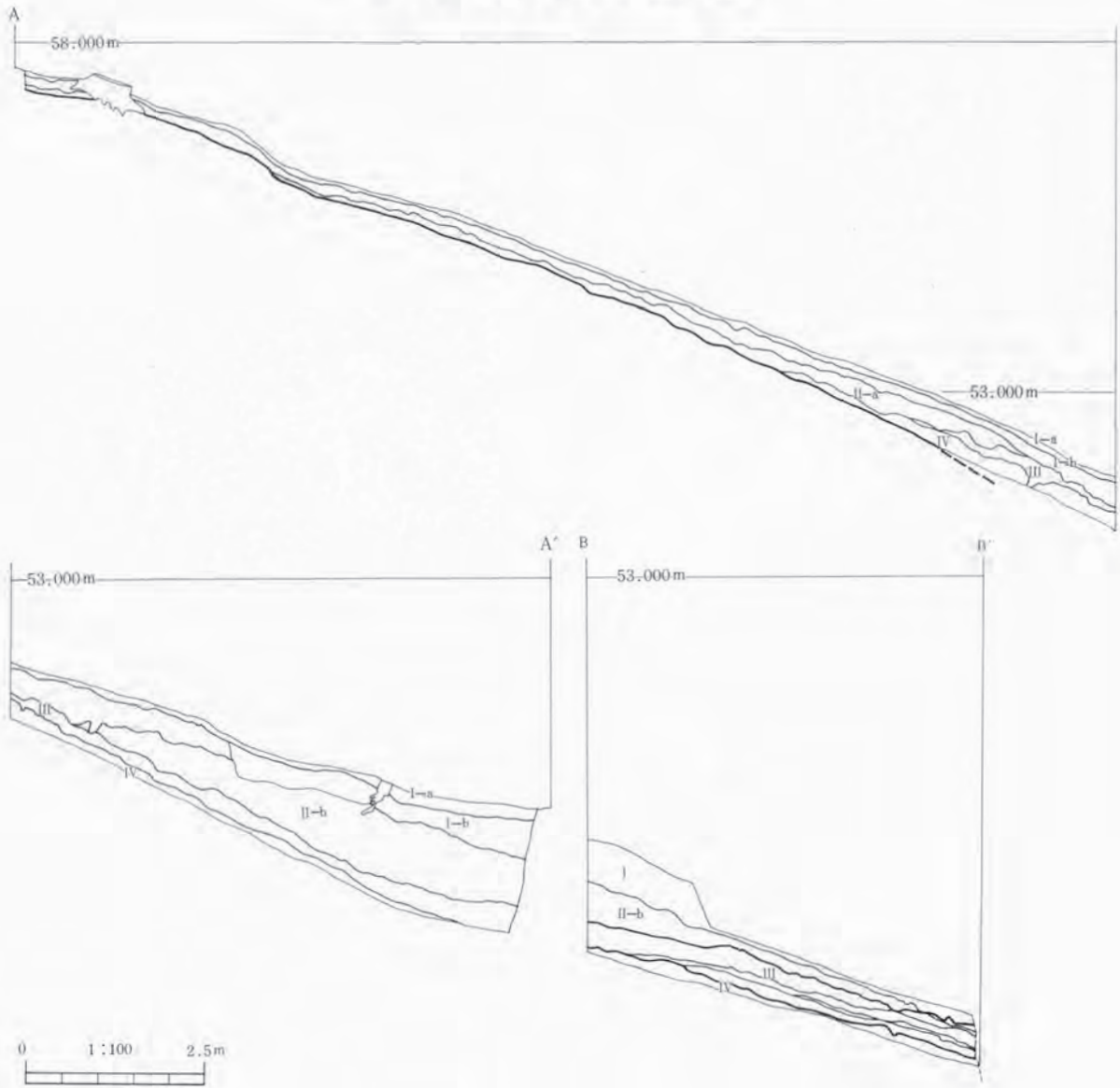
第3図 青猿 | 遺跡と周辺地形図



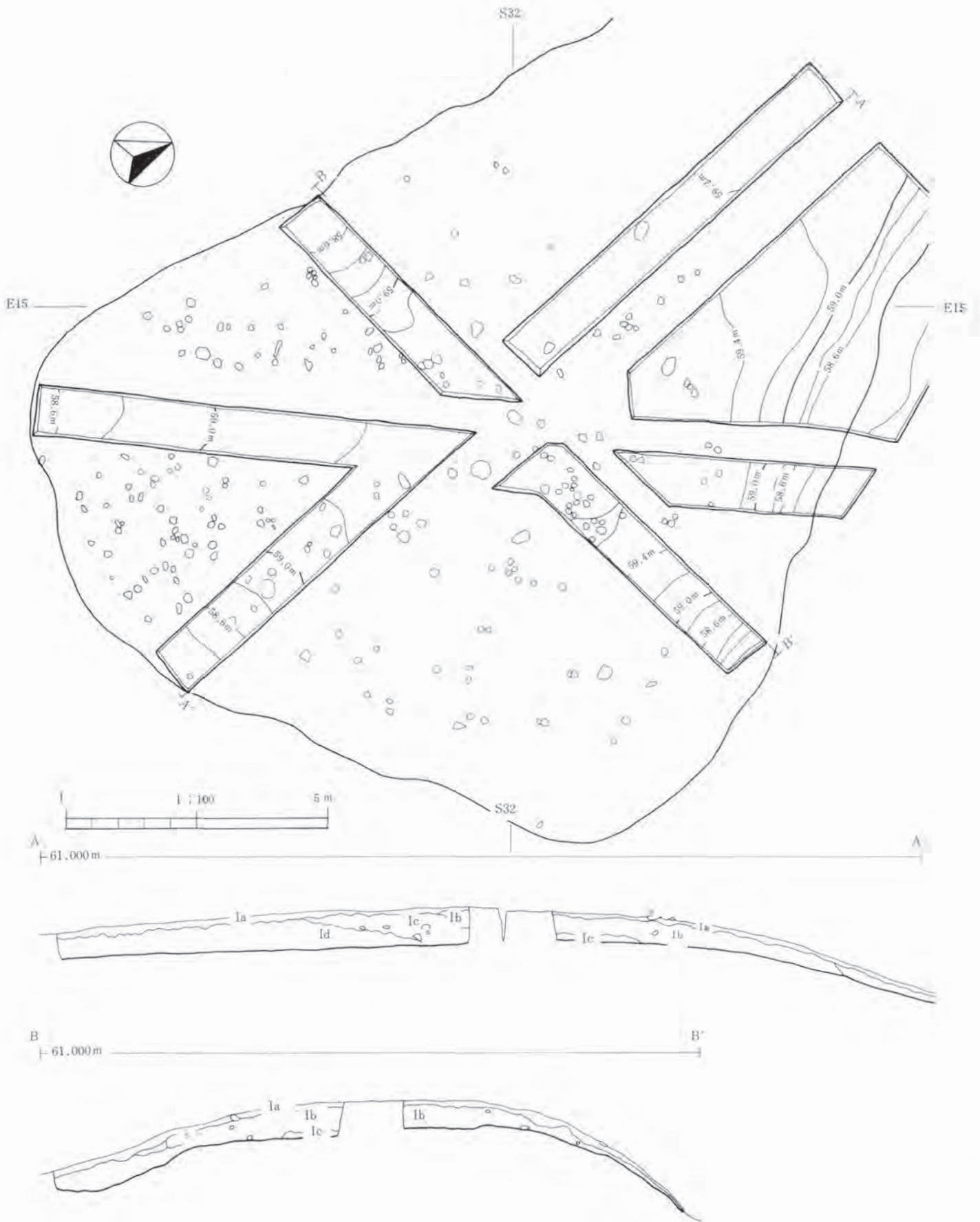
第4図 青猿 | 遺跡調査区全体図



第5図 青猿Ⅰ遺跡調査区位置図



第6図 青猿Ⅰ遺跡B区トレンチ断面図



第7図 青猿I遺跡G区全体図及び断面図

3-3) 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡(第8～10図 図版5～7)

南北方向に伸びる尾根から、東西方向に張り出す小尾根(調査区A区)のほぼ中央部付近に検出した。この小尾根自体、南北方向に伸びる尾根との接点付近から、かなり削平されたものらしく、遺構の残存状況は、東半部分が流出したり、カマドの煙道部が確認できなかつたりと良いものではなかつた。表土除去後の地山上で検出した。

北西・南西隅の状態から、ほぼ方形、ないしは長方形のプランを呈すものと考えられ、残存部においては、南北が6.2m、東西は3.65mをはかる。壁は、北西隅付近の西壁から南壁の一部しか検出できず、残存高で約0.3mをはかり、ほぼ直である。

埋土は、シマリ気のない褐色土層(A₁)の下に、マサ土が粒塊状に混入し、炭化物を含む暗褐色土層(A₂・A₃)からなる、自然堆積層である。

床面は、地山をそのまま利用しており、堅さ等の差異などは認められなかつたが、カマド付近が、幾分高く平坦である。全体的には東方向へ傾斜する。

床面及び東側には、44個のピットが、また、カマドから南側の西壁沿いには、床面から0.08mをはかる周溝状の落ち込みが検出された。ピットの大部分は、竪穴床面からの深さ0.1～0.3m程度のもので、明確に柱痕跡の確認ができたのは、5・6・10・15・20・27・41である。具体的な柱穴の配置や各ピットの対応関係などは把握できなかつた。ピット40は、カマドの東脇に存在する0.75×1.4m、床面からの深さ0.12mをはかる楕円形のピットだが、その底部には、比較的まとまって炭化物が出土した。

カマドは西壁のほぼ中央部に検出したが、明確な煙道部は確認できなかつたが、壁を西へ張り出すように掘っているのもともとは存在していたが、すでに削平されてしまったものと考えられる。カマドの構造は、本体部に大礫を配し構築されたものであるが、残存状況が著しく不良のため、詳細は不明。燃焼面は、竪穴床面の高さより幾分高い所に作られており、堆積する焼土は0.03cmをはかるものであった。

当住居跡から出土した遺物は、少なかつた。ほとんどカマド付近から出土したもので、甕の破片のみであった。復元可能なものはなく、第10図の実測図は、いずれも推定復元図である。

1は、甕の口縁部から体部中半にかけての破片で、推定口径16.8cmをはかるものである。体部は比較的内湾気味で丸味を持ち、頸部で外傾し、口唇部は外反気味にそのままぬける。内外面とも磨滅が著しく調整痕などは不明。厚さは、0.4～0.6cmと薄手だが、胎土には小石状の砂礫粒を多く含み脆弱で、焼成も良くない。2は、甕の底部破片で、推定底径11.0cmをはかるものである。1とは、別個体で、1と比らるとかなり焼成も良く、胎土もち密である。外面は、底面近くまで指ナデもしくはミガキ調整を施しており、底面との境付近は、指で整型し、調整もほとんどみられず雑な感じがする。内面は、底面にむかってミガキ調整されているが、上半の方は、磨滅が著しい。底面は、残存するほぼ全面をヘラケズリもしくはミガキ調整しており、平坦面である。また、外面の一部には、タール状の炭化物が比較的広範囲に付着している。

プラン

埋土

床面

周溝

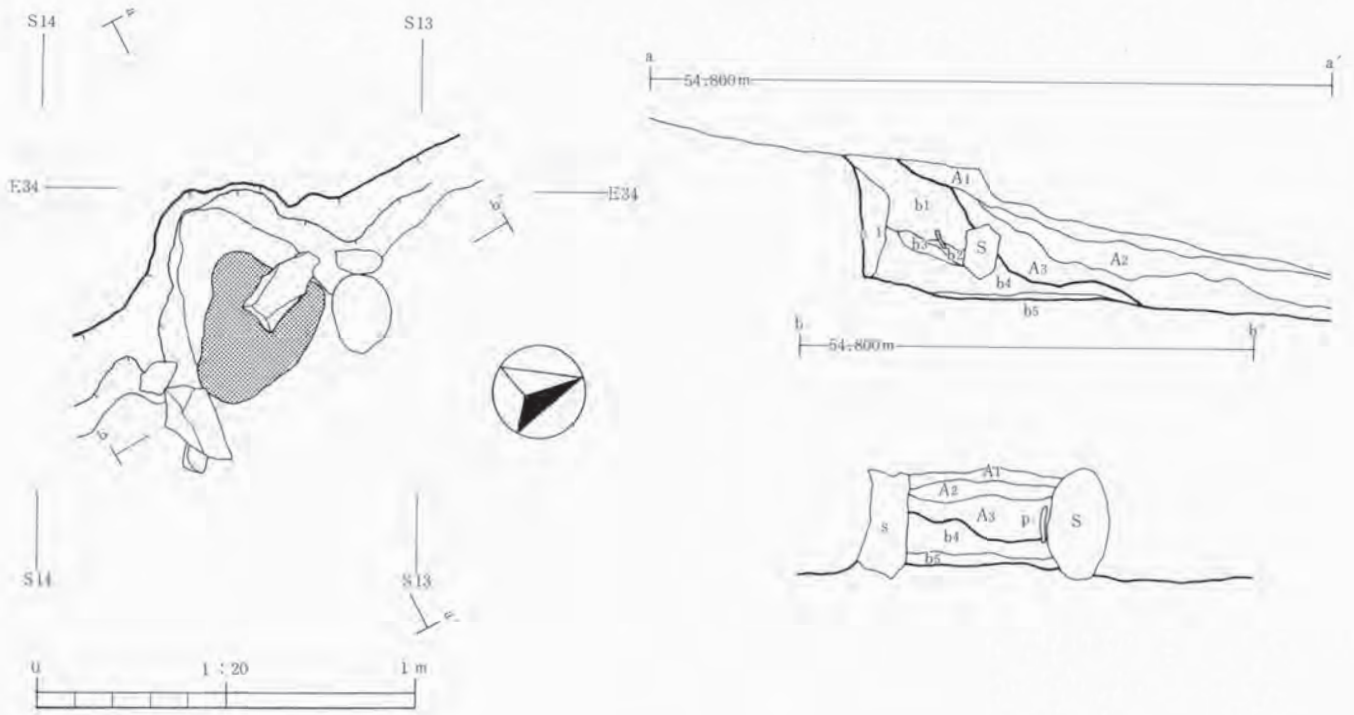
ピット

カマド

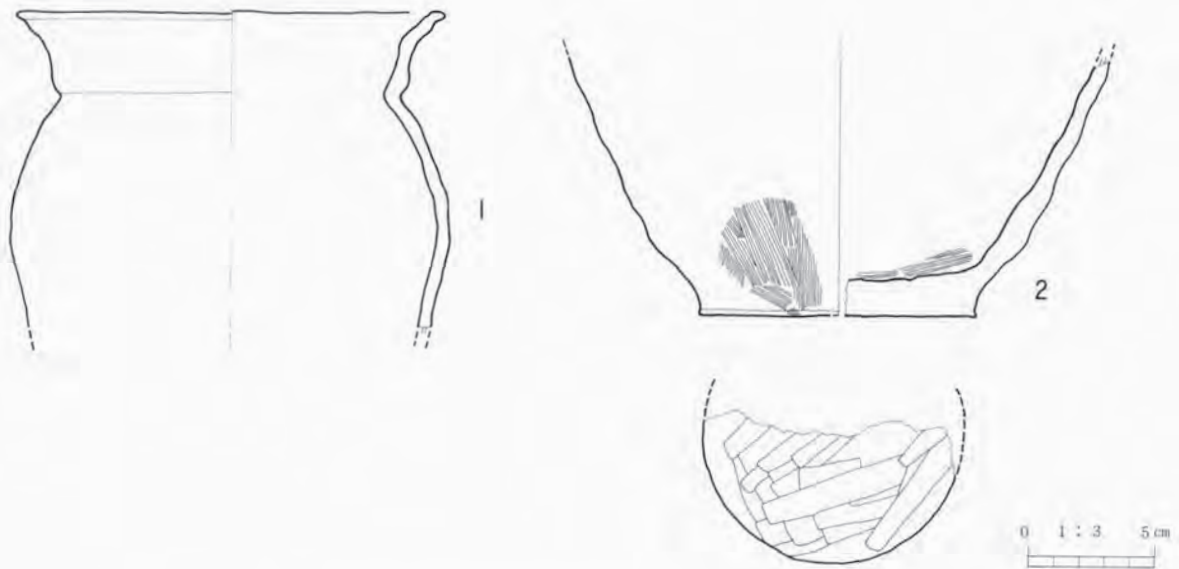
出土遺物



第8图 青猿I 遗迹第1号竖穴住居迹全体图



第9図 青猿I遺跡第1号竖穴住居跡カマド



第10図 青猿I遺跡第1号竖穴住居跡出土遺物実測図

3-14) 鉄関連遺構 (第11 ~ 13図 図版9 ~ 12)

第1号鉄関連遺構 竪穴住居跡を検出したA区小尾根北側の洞状の斜面下方に検出した。竪穴・炉本体部・廃滓捨て場から成る。

竪穴 炉本体背後の斜面を平場状に削平したもので、 2.45×1.45 mをはかる方形プランを呈す。焼土及び炭化物を含む比較的硬さを持つ黒褐色土(A₁A₂)が堆積する。壁は、ほぼ直に立ち上がり、標高49,800 m付近で消滅する。床面は、ほとんど平坦面で、黄褐色の粘土質土を大ブロック状に混入させた、黒褐色土で構築され、堅くしまる。床面及び、その周囲には柱穴状のピットなどは確認できなかった。

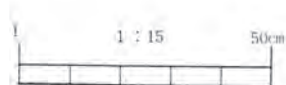
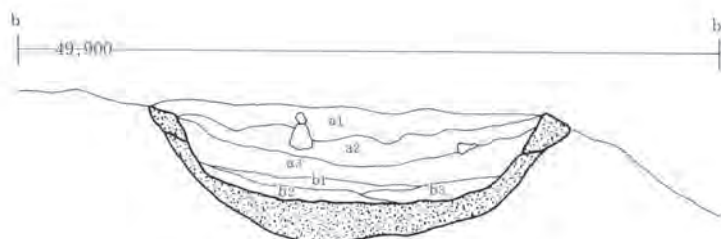
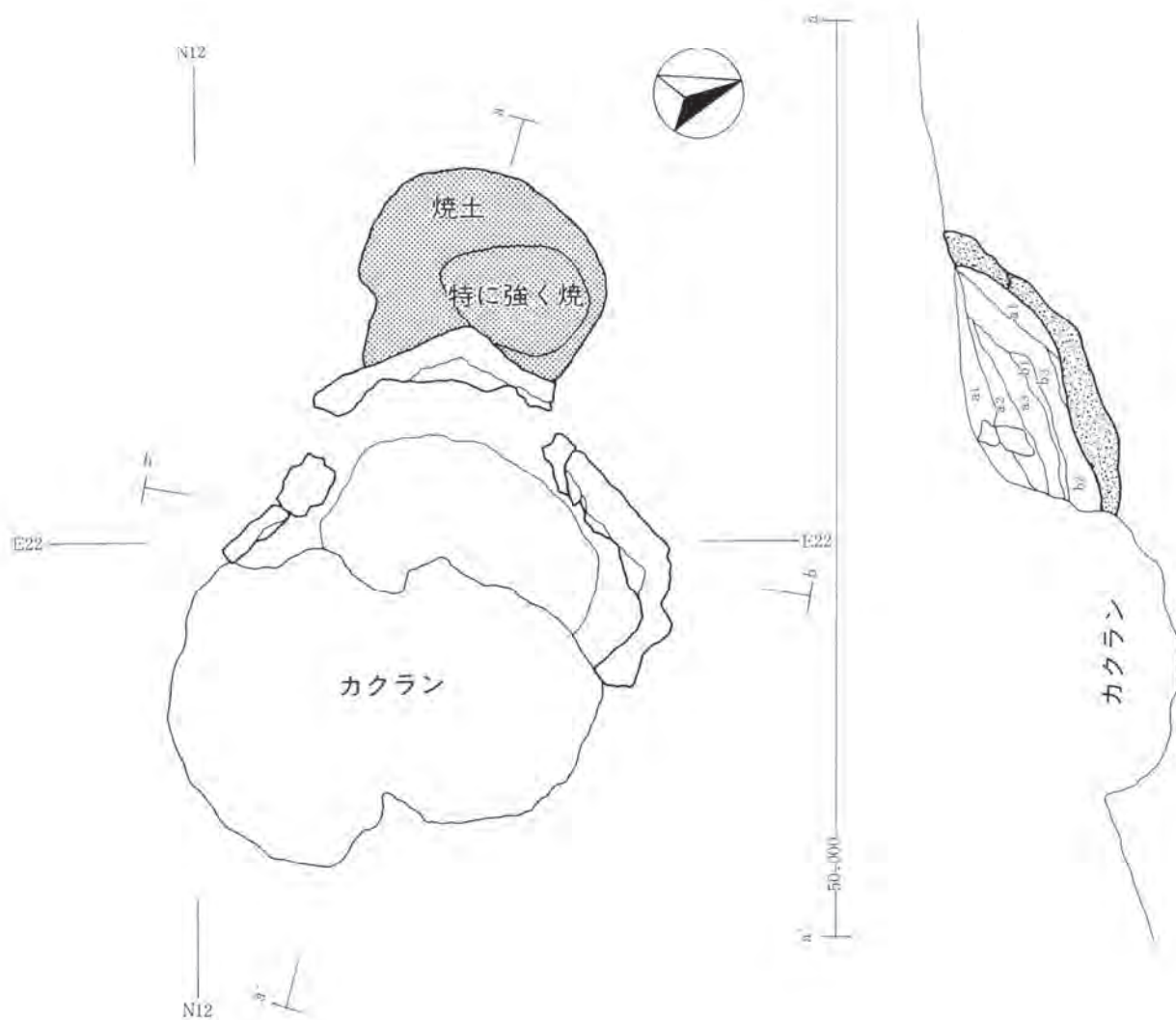
炉 炉本体は、竪穴の平場から傾斜面になる境に位置する。保存状況は極めて悪く、炉壁はほとんど残存せず、検出した段階においてはすでに炉底近くであった。竪穴側を背面とすれば、傾斜側の南半部は、ほぼ中央部付近から破壊され、喪失している。プランは、直径0.8 mをはかる円形を呈したものと考えられるが、残存する北半分でさえ、その原形をとどめていない。炉の背後には現地性の焼土が広がっているが、背面直は、特に強く焼けたようで、非常に堅くしまっている。炉壁はほとんど残っていないが、焼けてかたくなった粘土塊がところどころに見られることから、粘土をほり付けたりして構築していたものと考えられる。炉内には、前述した粘土塊や多数のスラグが埋まっていたが、上層には、炉壁を構成したと考えられる片面に、スラグの付着した粘土塊や発泡し樹状となったスラグ、焼土塊を多量に含む黒褐色土が下層には、細かいスラグが詰まった層(b層)が見られ、その下に非常に堅くしまった面を確認した。これが炉底と考えられるが、青灰色の粉状のものと、立ち上がりの部分(0.15 mほど)は、強く焼けた粘土が認められる。炉底の中央部付近が、碗状に幾分かくぼむ。

廃滓捨て場 竪穴・炉本体から約2.5 mほど離れた斜面の一番低い所に位置する。多量のスラグが 3.20×2.20 mの範囲に広がって堆積している。幾つかの層や、まとまりとしてとらえられたが、このうち今回調査した炉は、一番新しい層に伴うものだった。捨て場には大から小スラグの他、焼土塊・羽口・土師器の破片などがあつた。

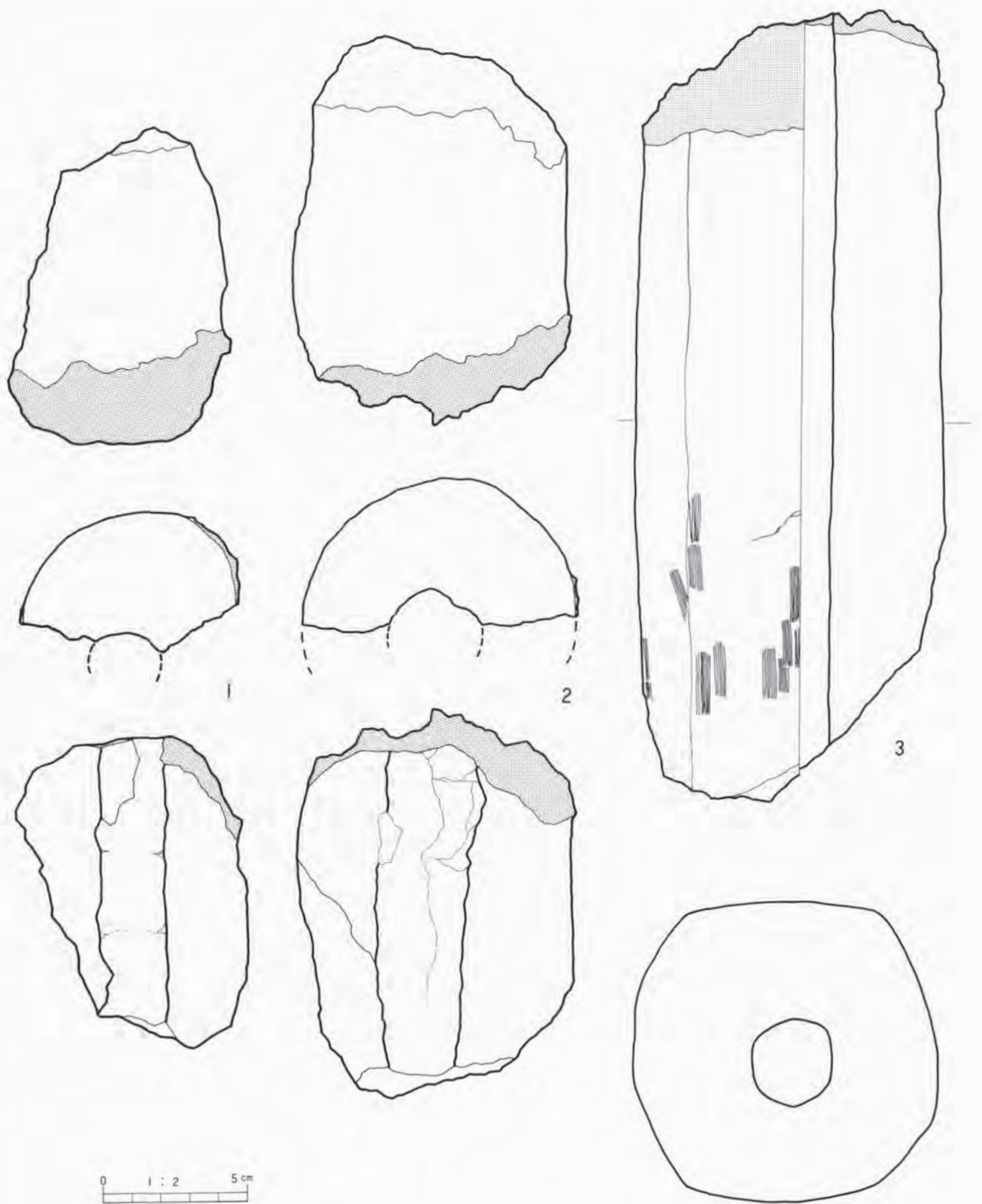
出土遺物 かなり大量のスラグ(個数にして1450点まで数えたが、細かいものを含めれば、約2000点は越えるものと思われる)が出土したが、大きく塊状滓・流動滓・碗型滓に分けられるが、大半は塊状滓である。碗型滓と考えられるのは、炉内から2点ほど出土している。またスラグには焼土・炭化物などの付着したものも見られる。磁性を有するのは、極くわずかで大部分は、磁性を有さない。羽口(第13図)は、廃滓捨て場から、他の大量のスラグや焼土塊などとともに3点出土した。すべて欠損品である。また、3点とも先端部に溶けて固まった金属が付着している。1、2は、ともに先端部の破片で円形の筒の一部しか残っていないものである。1は、金属の付着している先端部の方が焼きしまったようで、かたく、灰白から灰青色を呈し、円筒の内側は、朱色を呈しその内側は黄褐から灰褐色となる。円筒の直径は、推定で2.5 cmをはかる。2は、同じく3.3 cmをはかり1よりは若干大きい。3は、円筒状の形態をとどめており、残存長で、27.5 cm、円筒の外周で10.6 cm、貫通孔の直径3.0 cmをはかる。先端には金属が付着しており、特に貫通孔の周りは多量に付着しており、筒状に出っ張っている。外面は、整形したあとに指ナデもしくはミガキ調整されている。胎土は、さほど密さはなくポロポロと崩れている。



第II図 青猿I遺跡第I号鉄関連遺構全体図



第12図 青猿Ⅰ遺跡第Ⅰ号鉄関連遺構（炉本体）



第13図 青猿 I 遺跡第 1 号鉄関連遺構図出土遺物

3—(5) 土壙跡 (第14図 図版8)

土壙跡は、いずれも、だ円形の溝状プランで、開口部では比較的幅があり、底へ下がるほどせばまる形状を呈すピットで、陥し穴状遺構とか、Tピットなどと呼称されている土壙である。本調査区内では、いずれも南北方向に走る尾根の西側の緩斜面上にまとまって4基検出したが、調査区外にも存在する可能性も有る。

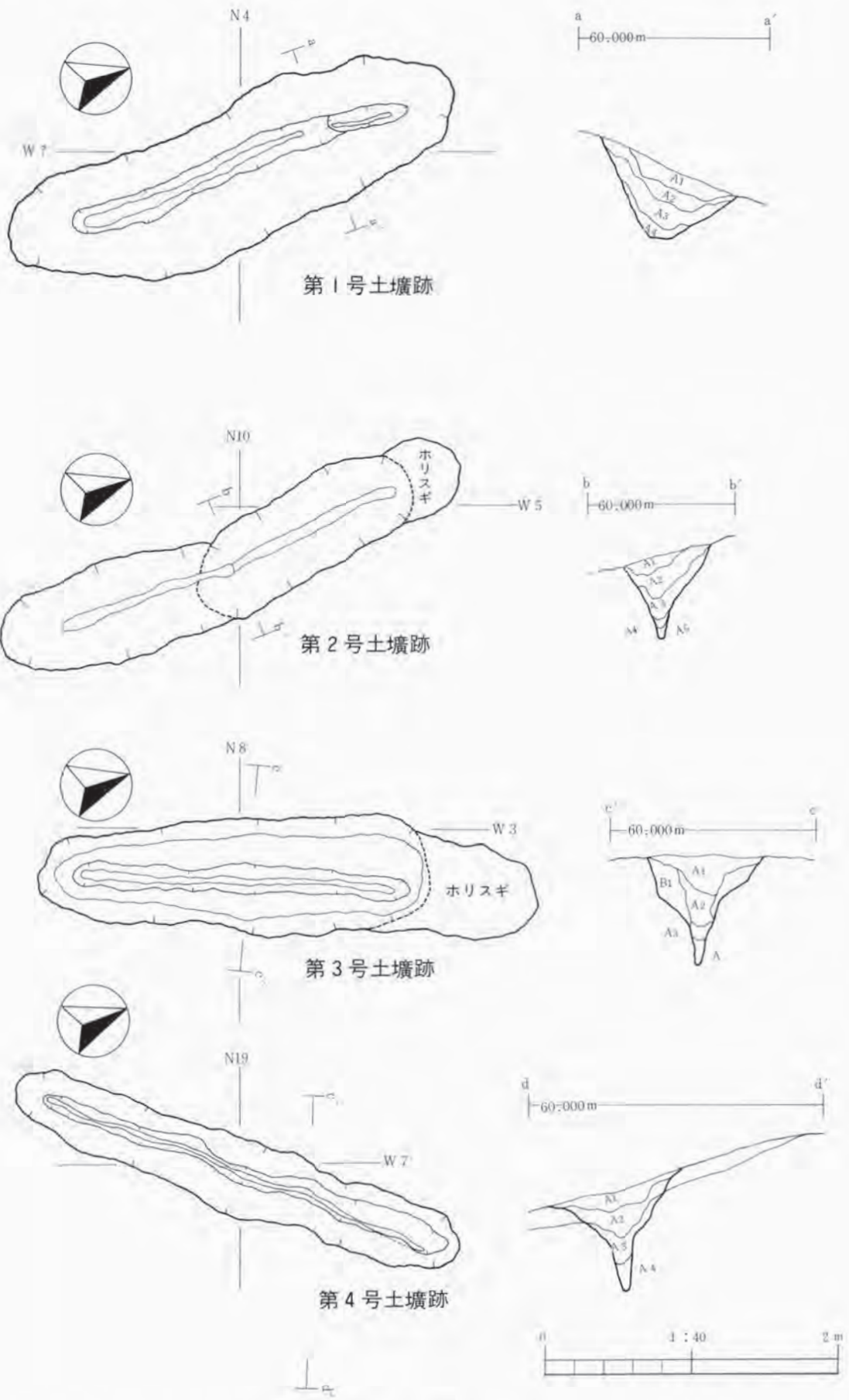
第1号土壙跡 開口部で3.2×0.9m、底部で2.42×0.22m、斜面上部からの深さで0.91mをはかる、だ円形の土壙である。埋土は、シマリのない褐色土の下に暗褐色土が堆積する自然堆積土層で、各土層には、黄褐色の地山ブロックが混入する。壁面は、だらだらとした傾斜をもち開口部に至り、かなり開いた形のV字形を呈す。底面は、ちょうど土層断面観察のために設定したベルト付近が、盛り上がり、他は大むね平坦である。

第2号土壙跡 長軸方向の北側を掘りすぎてしまったが、開口部で3.0×0.6m、底部で2.46×0.16m、斜面上部からの深さ0.64mをはかる、長だ円形の土壙である。埋土は、地山ブロックを多く混入する褐色土(A₂・A₃)をはさんで上と下にシマリのない暗褐色土(A₁・A₄・A₅)が堆積する自然堆積土層である。壁面は、東側の中ほどが一段テラス状に張り出し、開口部に至るV字形を呈す。底面は、ほぼ中央部付近で若干屈曲し、南側の方が下がり気味となっている。底面の状態から、新旧2時期の切り合い関係があったかもしれないが、確認できなかった。

第3号土壙跡 第2号土壙跡同様に長軸方向を掘りすぎてしまったが、開口部で2.65×0.8m、底部で2.14×0.06m、深さ0.74mをはかる長だ円形のピットだが、西側が少しふくらみ気味である。埋土は、両壁沿いに地山の大ブロックを多量に含む黄褐色から褐色土の壁崩壊土と考えられる層(B₁)、褐色土から暗褐色土を主体とする地山ブロックを含むシマリ気のない土(A₁～A₄)で、自然堆積土層と考えられる。壁面は、中ほどがテラス状に一段張り出し、底部のせまさに比して、かなり大きく開き、開口部に至るV字形を呈する。底面は、ほぼ平坦面である。

第4号土壙跡 開口部で3.2×0.54m、底部で2.75×0.05m、斜面上部からの深さ0.68mをはかる長だ円形ピットだが、第1号から第3号土壙跡に比べて、かなり開口部の短軸幅が小さく細身である。埋土は、上と下にシマリのない暗褐色土(A₁・A₃・A₄)、中位に褐色系の土を主体とする暗褐色土混じりの層(A₂)が観察される自然堆積土層である。壁面は、底面から0.38m付近まではほぼ直だが、それ以降は、開口部に向かって大きく開くV字形を呈す。底面は、多少蛇行気味だが、ほぼ平坦面である。

以上の第1号から第4号土壙跡からは、遺物は全く出土しなかった



第14図 青猿 | 遺跡土壌跡

4. 調査のまとめ

青猿 I 遺跡の発掘調査の内容は、以上のとおりであった。以下、若干の考察を加えながら遺構を中心にまとめてみる。

竪穴住居跡

竪穴住居跡は、試掘調査においても4棟検出しており、周辺部の尾根平坦部にも続いて存在するものと考えられる。今回精査した竪穴住居跡は、残存状況が良くなく、詳細を把握しきれなかったが、その規模が比較的大きい事、出土遺物が極端に少ない事、その立地条件が狭い尾根上で特異な事などが言える。また、明確に時期的な対応関係がはっきりとしていないが、鉄関連遺構との関連は、当然考えていかなければならない問題点である。

鉄関連遺構

鉄関連遺構は、層位的にも、また、わずかであるが土師器片が出土した事などから明らかに平安時代に属するものである。炉本体部の他、方形の平場（竪穴）、廃滓捨て場から成る。炉自体はかなり破壊を受けており、その構造ははっきりとしないが、①炉径が0.8mをはかる ②炉壁は粘土により構築されている ③炉の原形を全くとどめていない ④炉背後がかなり焼けている ⑤炉前面部は破壊されている。⑥炉本体背後に平場、約2.5m離れた斜面下部に廃滓捨て場を伴う などの特色が見られる事から製錬炉（製鉄炉）と考えられる。むしろ形態は、静岡県日詰、金山遺跡など伊豆半島に分布するものを示準例とした円筒自立炉に似た構造を示す。県立博物館の高橋・赤沼両氏によれば、鉄滓の化学的分析により製錬炉、もしくは鍛冶炉か判断できるとされる。また、東日本に多いとされる半地下式とは、斜面三方を掘り込んでいる程ではないことから、半地下式のものとは考えにくい。

今後、この分析結果と合わせて、当遺構について再考してみたい。

土壌跡は、時期不明の陥した穴状の土壌4基を調査した。

陥し穴状遺構

このうち陥し穴状のものは、いずれも溝状の長だ円形プランを呈すものである。岩手県内の同遺構については、瀬川司男、田村莊一両氏により研究がなされている。また、最近では、今村啓爾氏による論考も発表されており、注目される。さて、田村氏の分類によれば、第1号～4号土壌跡は、A₂型に属するものとなる。更にA₂型は全県的にみても数が最も多く、単独、もしくは、2、3基1組で存在する事例が多いと言う。確かに今回検出したものも、同時期かどうかは不明だが、4基が1組とも言う見方もできる。

このような遺構の機能については、言及していないが、今村氏の論考によれば陥穴であり、特に、A₂型の場合は、北海道～東北地方北部に多く分布し動物（特に鹿と想定している）をはさみ込んで動けなくする意図を持って作られたものと論考している。それにしても、動物遺存体が多数出土する貝塚が存在する沿岸部における事例が少ない。宮古市においては、今回調査された4基が初見である。ただ、近年大規模発掘が相次いでいる久慈市においては、かなりの事例が報告されており、今後、沿岸部においても、当該遺構の発見される事は充分予想される。

（参考・引用文献） ○『季刊考古学』第8号 1984年 雄山閣

- 土佐雅彦 「日本古代製鉄遺跡に関する研究序説」『たたら研究24』 たたら研究会 1981年
- 飯島武次・穴沢義功 「群馬県太田市菅ノ沢製鉄遺構」『考古学雑誌55-2』日本考古学会 1969年
- 高橋一夫 「古代の製鉄」『講座・日本技術の社会史第5巻 採鉱と冶金』日本評論社 1983年
- 瀬川司男 「陥し穴状遺構について」『紀要Ⅰ』岩手県埋蔵文化財センター 1981年
- 田村莊一 「陥し穴状遺構の形態と時期について」『紀要Ⅶ』岩手県埋蔵文化財センター 1987年
- 今村啓爾 「陥穴」『縄文文化の研究2』 雄山閣 1982年

IV 下在家II遺跡

1. 下在家II遺跡の立地と環境 (15図・図版13)

下在家II遺跡は、岩手県宮古市大字崎嶽ヶ崎第11地割字下在家地内に所在し、小本丘陵（II遺跡をとりまく環境を参照）上に立地し、標高90～100mをはかる。

小本丘陵は、洪積世の海岸段丘が開析され生じたものだが、その段丘面の保存状況が極めて悪く、花崗岩などの基盤岩が露出している地域が多い。当遺跡も含め、わずかに残った段丘面やこれらに連続する緩傾斜面上に立地する多くの遺跡の集まりである。女遊戸・崎山遺跡群の中でも一番南側に存在するもので、更に小河川により開析された谷底平野に囲まれた尾根状の景観を呈す舌状台地の先端部に立地する。

女遊戸・崎山遺跡群は、更に女遊戸川により北部の女遊戸、南部の崎山の遺跡群に分けられる。崎山の遺跡群には、現在、28ヶ所の遺跡が存在するが、いずれも縄文時代のものである。これらの遺跡と立地などについては、『崎山遺跡群I』において詳述している。

Sa-21崎山貝塚、Sa-06大付遺跡は、獣魚骨や貝類、骨角器などを出土する遺跡として、また、Sa-07日出島遺跡、Sa-11わたのは遺跡、Sa-14古里遺跡は、古くからその存在が知られていた。

Sa-21崎山貝塚は、昭和61年度から5ヶ年計画でその内容把握のための発掘調査が実施されており、今年度の調査では、貝層及び獣魚骨層を検出しており、骨角器なども出土している。

Sa-05白石遺跡は、昭和40年代に縄文時代の貝層を伴うフラスコピットが田村忠博氏（前宮古市文化財審議委員）によって発掘されたが、詳細は不明。更に、昭和61年度には遺跡の東端部、昭和61～62年度にかけては西端部において、個人住宅建築に先立つ緊急発掘調査が実施され、縄文時代中期の竪穴住居跡が発掘調査されている。

Sa-24トロノ木I遺跡は、昭和56～60年度にかけて、発掘調査が実施され、縄文時代中期（大木8b式期）の竪穴住居跡や近世の掘立柱建物跡、井戸跡などを検出している。（未報告）

Sa-26トロノ木IV遺跡は、昭和60年度に緊急発掘調査が行なわれ、縄文時代の竪穴住居跡4棟、石組炉2基などが調査、報告されている。

Sa-06大付遺跡は、昭和53年度に岩手県立博物館により緊急発掘調査がなされ、縄文時代晩期の屈葬人骨1体の他、多数の遺物を出土し、『大付報文79』にまとめられている。また、昭和60年度には、遺跡の西端部でフラスコピットが調査されている。（未報告）

その他、各遺跡からは、縄文時代早期から晩期にかけての多数の遺物が表採されているが、現在の所、土師器・須恵器などの古代の遺物の出土は知られていない。

2. 下在家II遺跡の調査経過と概要

2-1(1) 調査の経過及び方法

調査は、試掘調査という形で始めたが、当初想定していたような竪穴住居跡などの遺構は検出されず、土壇跡5基、貝ブロックなどを調査し、8月12日には終了した。

下在家II遺跡

小本丘陵

立地

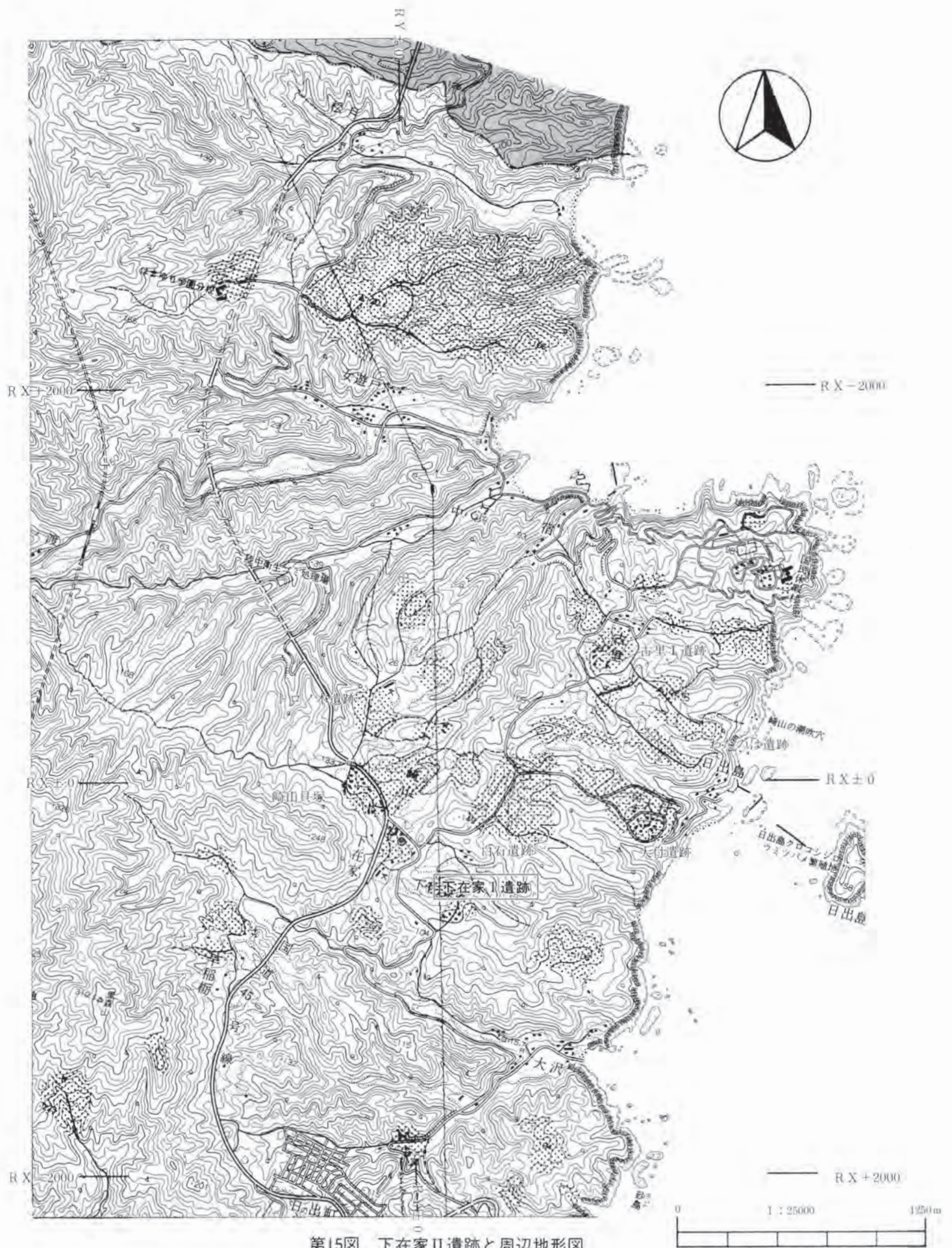
崎山貝塚

白石遺跡

トロノ木I遺跡

トロノ木IV遺跡

大付遺跡



調査の方法は、調査対象区が 16743㎡と広大なため、遺構の存在可能性の高い尾根上の平坦部及び緩斜面を中心にトレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認した。

調査座標は、平面直角座標第X系を、崎山遺跡群調査用に座標変換した局地的な座標体系（原点X-35800.000、Y+97000.000）を使用した。

なお、今回の調査では貝類が大部分の自然遺物のブロックを検出、調査したが、これについては、調査の段階において可能な限り一括して投棄されたと考えられる1ブロックを1層として、その拡がりを記録し、その土砂をすべて袋づめにし持ち帰った。これらは、整理作業の段階において、1mmのふるいで水洗撰別し、更に2mmのふるいにかけて残ったものについて、各層に含まれているものの内容分析を実施した。2mmのふるいを通ったものについての内容分析については、かなり時間的に日数を要するため今年度の報告書には間に合わなかった。

2-2) 調査の概要

今回の調査で検出した遺構・遺物は次の通りである。

〈検出遺構〉○小土壇4基、大土壇1基。いずれも時期的には不明。また、大土壇の埋土の一部に貝類を中心とした自然遺物のブロック（貝ブロック）を検出したがこれも所属時期は不明である。

〈検出遺物〉○出土遺物量は極くわずかであった。縄文時代の土器片はいずれも極小片であった。石器は、石鏃が1点出土している。

○自然遺物は、本文において詳述するが、ムラサキインコガイ・エゾアワビ・イガイなどの貝類の他、少量ながらマダラなどの椎骨などが出土している。また、貝層土分析により鉄製の釣針が出土している。

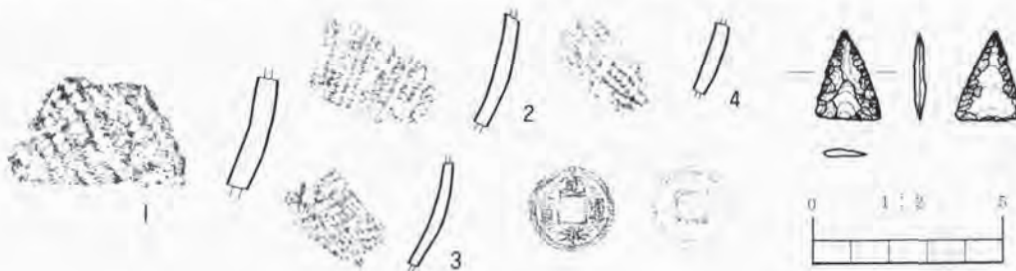
2-3) 出土遺物（第16図・図版18）

貝ブロック以外から出土した遺物は極くわずかのため、ここに記載する。すべて遺構外。

縄文土器—すべて極小破片。いずれも体部片で、1は、単節の斜縄文が施文され、胎土にはかなり粗い砂粒が混じる。焼成は良く内面は横ナデしている。セシイは含まない。

2～4は、厚さ0.3mmと薄手のものでミニチュアないし小型の土器の体部片。表面には単節の細かい斜縄文が施される。胎土にはやはり粗い砂粒子を含む。セシイは含まない。

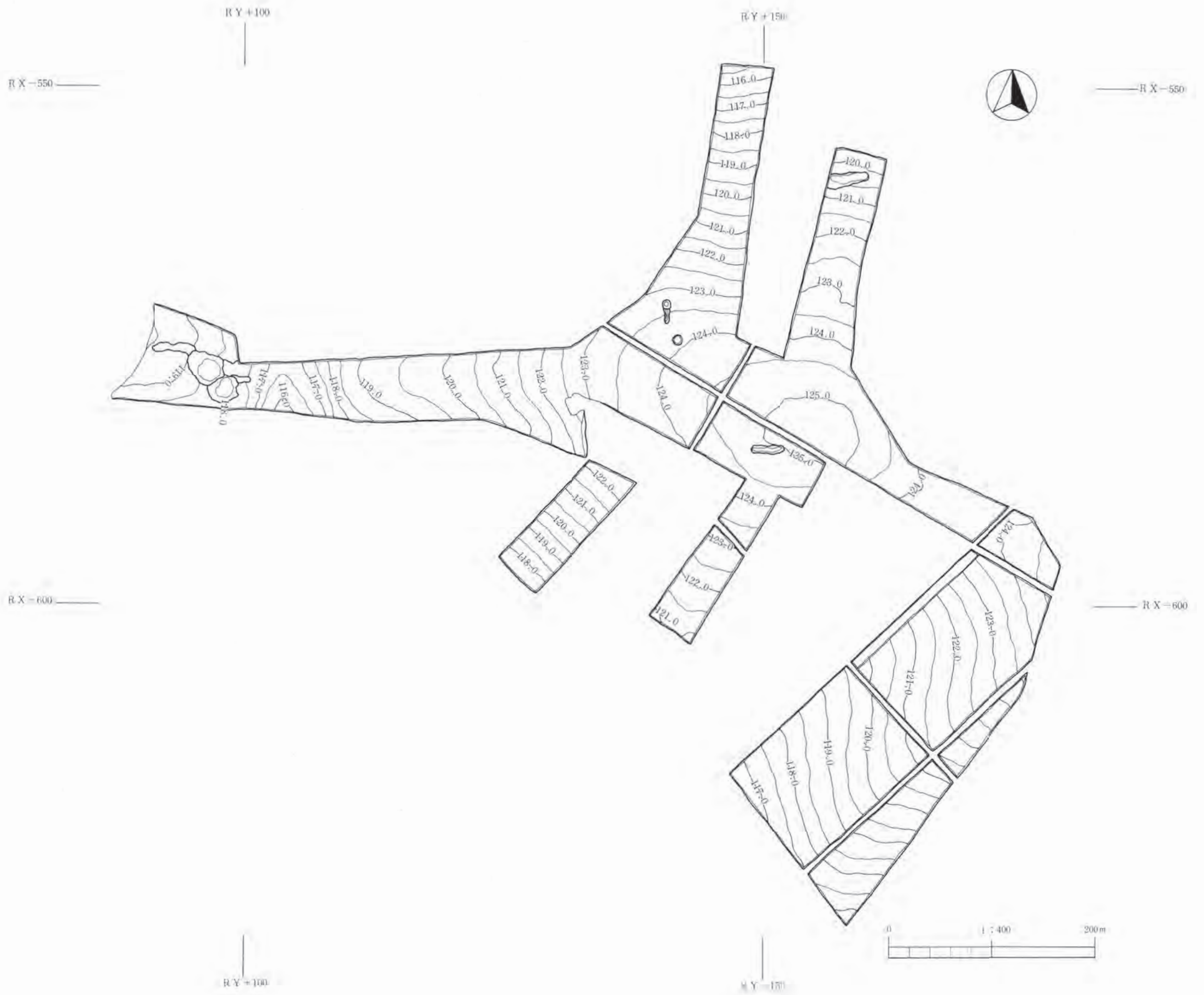
石鏃—無茎平基の三角形状を呈す。第一剥離面を両面に大きく残し、縁辺部に細かい調整剝離を施したものの。石質はチャートもしくは砂岩である。**寛永通宝**—表土除去中に出土したもの。



第16図 下在家II遺跡出土遺物



第17図 下在家Ⅱ遺跡調査区位置図



第18図 下在家Ⅱ遺跡調査区全体図

3. 下在家Ⅱ遺跡から検出した遺構・遺物

3-1(1) 土壌跡(第19・20図)

第1号～第3号土壌は、調査区内で東西方向にのびる尾根の平坦部、第4号土壌跡は、その尾根から北東方向にのびる尾根の斜面上に検出した。いずれも出土遺物はない。

第1号土壌跡 R X-585、R Y+150付近に位置する。開口部で3.05×0.33m、深さ0.33mをはかる長だ円形のプランを呈す。埋土は、柔らかく、シマリ気のない褐色系の土が堆積する。壁面は、幾分開口部へ傾斜するが、ほぼ直に立ち上がる。底面は、若干凸凹が見られるがほぼ平坦面である。

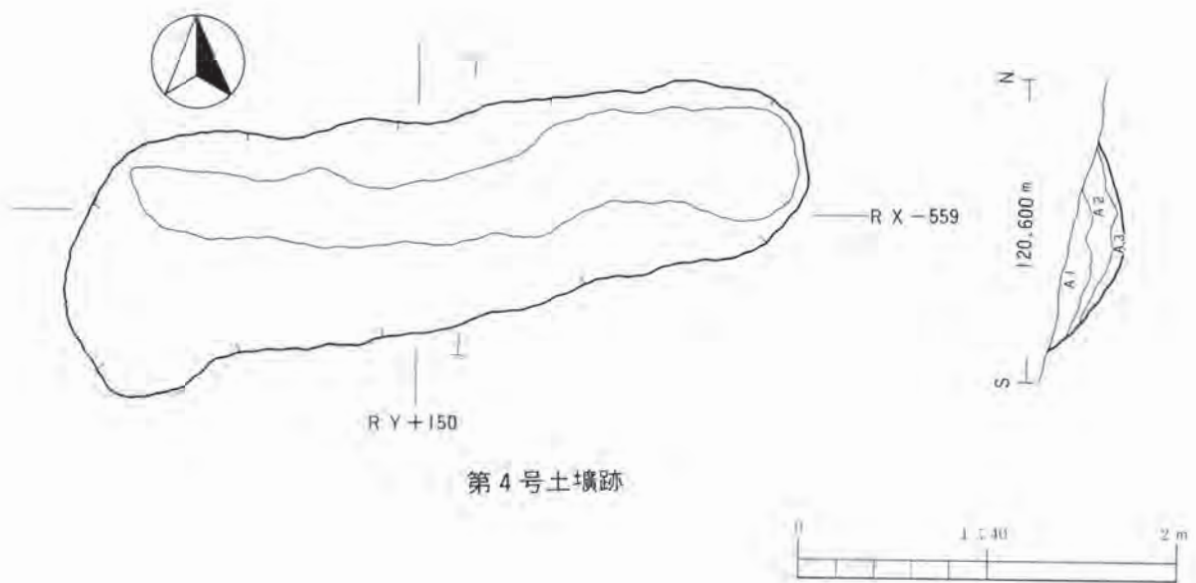
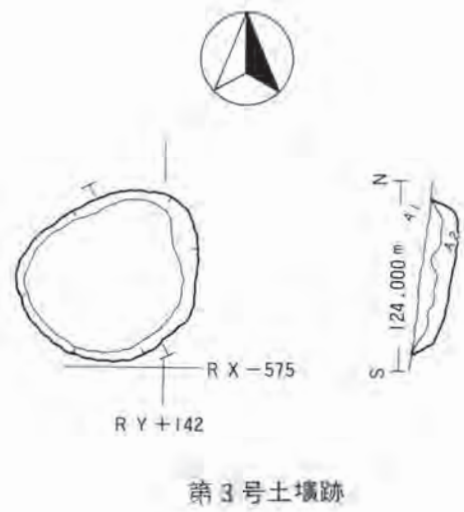
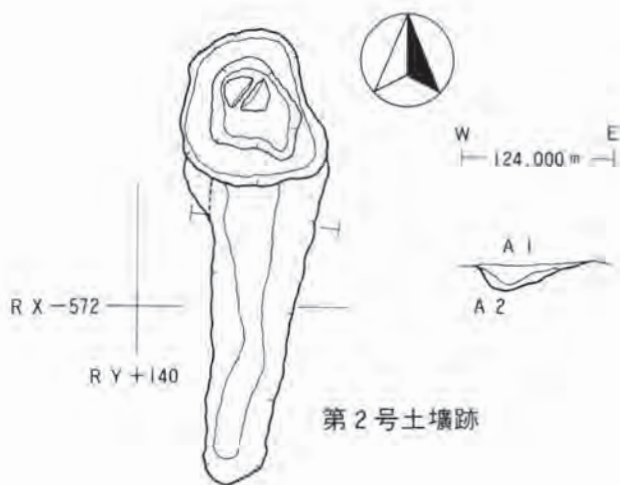
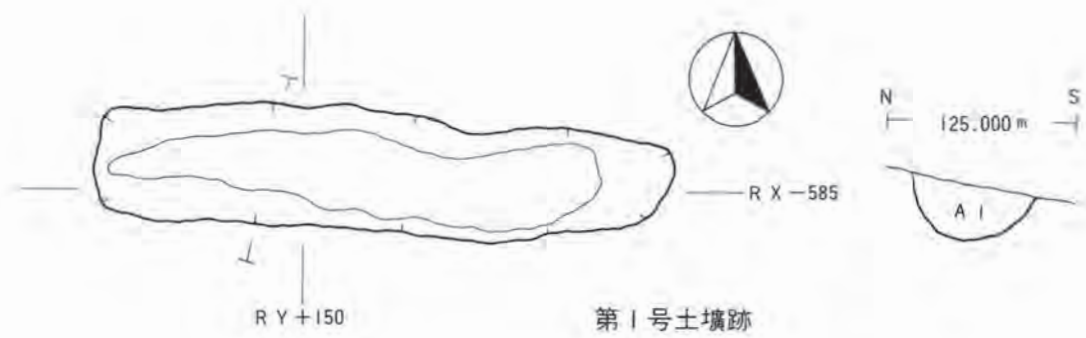
第2号土壌跡 R X-572、R Y+140付近に位置し、2基の切り合ったものだが、新旧関係は確認できなかった。北側のものは、0.75×0.83m、深さ0.30mをはかり、ほぼ円形のプランを呈する。埋土は、若干粘性を有し、比較的シマリ気をもつ褐色系の土を主体とする。底面は、ほぼ平坦で、中央に割れて2つになった扁平な石があった。南側のものは、長軸で1.6m、短軸で0.55m、深さ0.15mをはかる長だ円形プランを呈す。埋土は、褐色系の土を主体とした層(A1)とその下に堆積する、シマリのない褐色～黄褐色土(A2)から成る。壁面は、ゆるやかに立ちあがり、底面はほぼ平坦である。

第3号土壌跡 R X-575、R Y+142付近に位置する。1.0×0.92m、深さ0.18mをはかるほぼ円形プランを呈す。埋土は、上部に暗褐色土(A1)、下部に褐色土(A2)が堆積し、ともにシマリのない土である。浅い皿状のピットで、底面は、ほぼ平坦である。

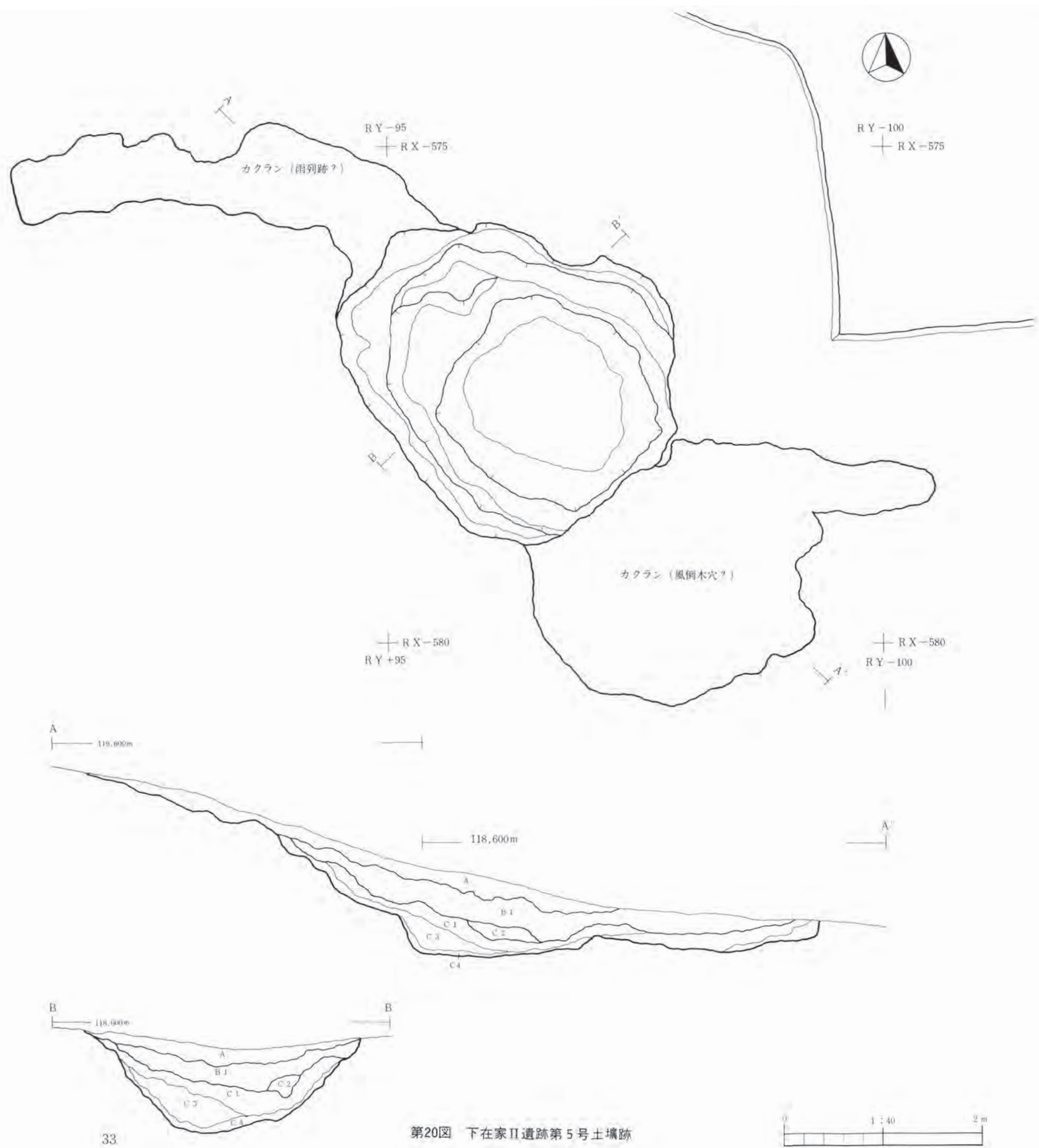
第4号土壌跡 R X-559、R Y+158付近に位置する。3.92×1.15m、深さは斜面上部から0.4mをはかる長だ円形プランを呈す。埋土は、全くシマリ気のない軟らかい暗褐色土を主体とし炭化物を比較的に多く含み、焼土のブロックが混入した層(A1)の下に、褐色系の土を主体とした層(A2)が堆積する。壁面及び底面は、開いたU字形を呈する。

第5号土壌跡 R X-577、R Y+97付近に位置する。西側は尾根頂上付近から溝状に走り谷部に抜ける溝、(雨列跡?)、東側は大きな土壌(風倒木痕?)によって攪乱される。3.5×2.8m、深さ0.95mをはかる、ほぼ円形の大土壌である。埋土は、大きく3層に分けられる。A層は、暗褐色のシマリのない土で、大小の礫を多く含む。雨列跡?と思われる溝の埋土で、この土壌のほぼ全域を覆うように堆積する。B層は、北西から南東方向に堆積し、南東側へ流出する。黄褐色土層で、粒状の炭化物を多量に含み、量的には少ないが焼土の粒もみられる。C層は、褐色のシルト質の砂壤土で、この上に貝ブロックが形成されている。C1層は、焼土塊や炭化物を多く含み、C3・C4層は少なくなる。壁面は、凸凹が著しく、特に、北西側は、段状になっている。底面は、ほぼ平坦面を呈す。出土遺物は、貝ブロックを除けば皆無に等しく、わずかにかなり腐蝕し形状をとどめない小鉄塊数点と、取っ手金具のような鉄製品2点がC1層から出土しただけで、土器・石器・陶磁器の類は1点も出土しなかった。

貝ブロック



第19图 下在家II遗迹第1号~第4号土壤迹



第20図 下在家Ⅱ遺跡第5号土壌跡

3-2) 貝ブロック

第5号土塊跡の埋没過程において、土塊の南東隅に形成された貝ブロックで、8層に分けられる。出土した動物遺存体は、ムラサキインコガイやエゾアワビなどを中心とする貝類が主体を占めるが、土砂の水洗撰別によりマダラなどの魚骨椎骨などもわずかながら含まれていることが判明した。貝類の保存状況は比較的良い。以下、種の同定できたものを記す。

I 軟体動物門 Phylum MOLLUSCA

(1) 腹足綱 Gastropoda

1. エゾアワビ *Haliotis discus hanndi* Ino
2. ベッコウガサガイ *Cellana grata grata*
3. マツバガイ *Cellana nigrolineata*
4. ユキノカサガイ *Aamaea pallida*
5. アオガイ *Notoacmea schrenckii schrenckii*
6. シロガイ *Gollisella pelta shirogai*
7. クボガイ *Chlorostoma argyrostoma lischkei*
8. コシダカガンガラ *Omphalius rusticus*
9. タマキビ *Littorina brevicula* (PHILIPPI)
10. レイシガイ *Reishia bronni*
11. チチミボラ *Nucella heyseana*
12. エゾチチミボラ *Nucella freycineti*
13. 陸産マイマイ

(2) 二枚貝綱 Bivalvia

1. ホタテガイ *Patinopecten yessoensis*
2. コベルトフネガイ *Arca boucardi*
3. エゾイガイ *Grenomytilus grayanus*
4. ムラサキインコガイ *Septifer virgatus*
5. ヌノメアサリ *Novathaca euglypta*

II 節足動物門 Phylum ARTHROPODA

(1) 蔓脚亜綱 Cirripedia

1. フジツボ科 *Balanidae* gen. et. sp. indet

III 棘皮動物門 Phylum ECHINODERMATA

(1) 海胆綱 Echinoidea

1. マバンウニ *Hemicentrotus pulcherrimus* (A. Agassiz)
2. ムラサキウニ *Anthocardaris crassispinaa* (A. Agassiz)

IV 脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA

(1) 軟骨魚綱 CHONDRICHTHYES

1. サメ類の一種

(2) 硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

1. アイナメ *Hexagrammos otakii* (JÖRAN et SCHLEGEL)
2. マダラ *Gadus macrocephalus* TILESIVS
3. カサゴ科 *Scorpaenidae* gen. et sp. indet

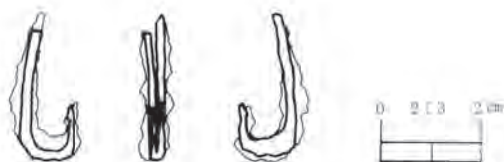
以上、貝ブロックから出土した動物遺存体名を記載した。軟体動物17種、節足動物1種、棘皮動物2種、脊椎動物4種の計24種となる。出土量全体からみれば、脊椎動物の占める割合が極端に小さい。

形成過程

貝ブロックの形成過程を推測すれば、この第5号土壌跡がC層まで埋没した段階において、その緩傾斜部の下方から投棄が始まり(8層)、以後一番新しい投棄(1層)まで徐々に緩傾斜部の上方に向かって積み重なるようにして形成されたものと考えられる。ブロック厚は、0.15~0.22m、一番下位から上位までの比高差は、0.45mをはかる。各層の拡がり方を見ると、8~6層までは、斜面の下方に拡がり、5・4層において上方にまで拡がり、3・2層において再び下方に投棄され、最後に上方から下方にかけての拡がりを持つ1層が見られ、ほぼ斜面部を平坦部にするように投棄して行なったものと考えられる。

釣針

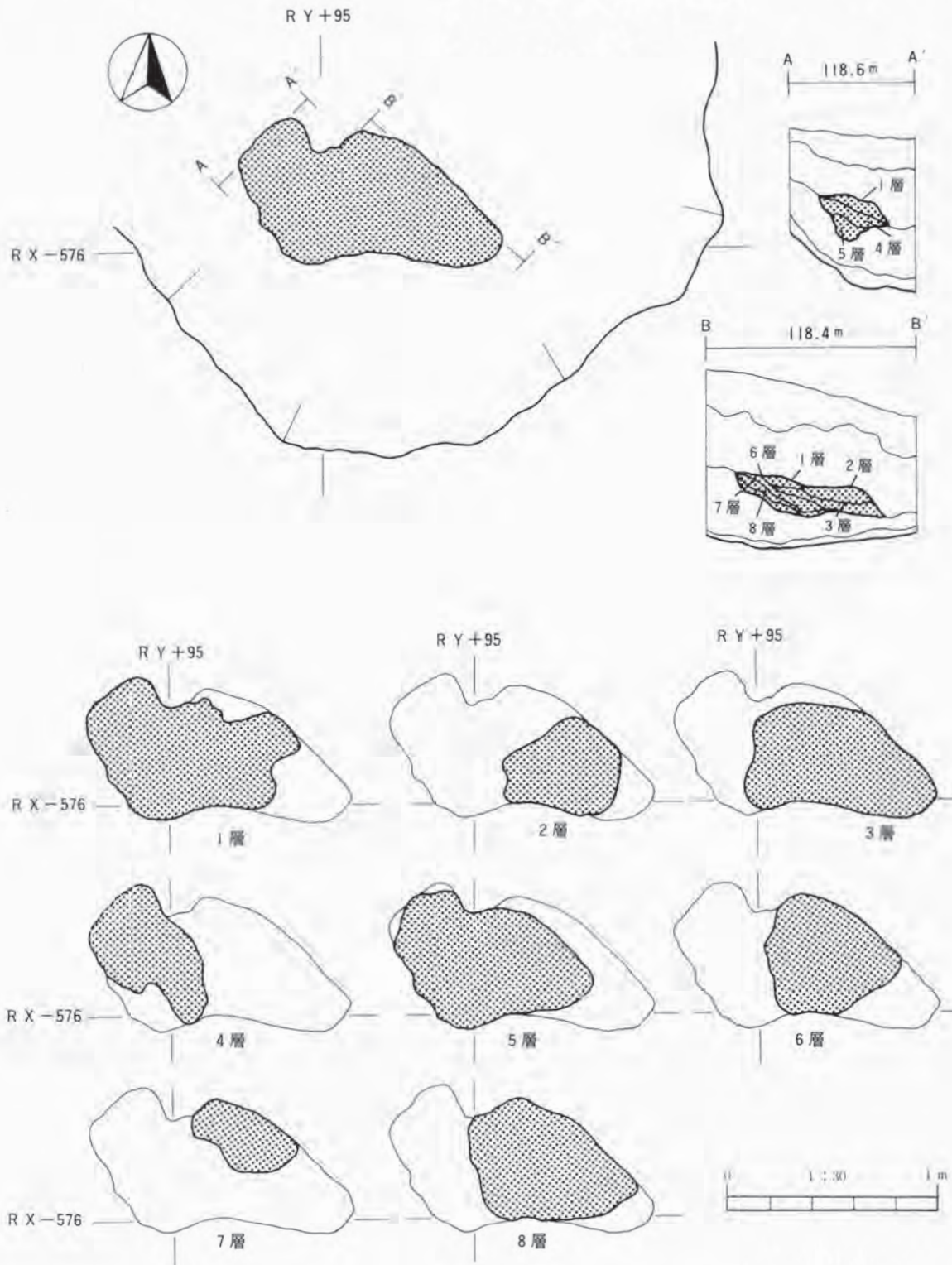
6層土には、ふるい分けをした結果、鉄製の釣針(第21図、図版18)が含まれていた。かなり腐蝕が著しいが、2本が一緒になっているものである。どちらも、チモト部を欠くが、1本には、明瞭に内鐵が見られる。どちらも形態的には同様なものである。



第21図 下在家II遺跡貝ブロック出土釣針図

	層名	土色	土性	総体積(cc)	総重量(g)	層の特徴
1層	混貝土層	褐色 (10Y R $\frac{3}{4}$)	砂壤土	13,850 (900)	12,285 (775)	ムラサキインコガイ、タマキビ多い。 サメ類椎骨、アイナメ後側頭骨出土。
2層	混土貝層	暗褐色 (10Y R $\frac{3}{4}$)	砂壤土	6,720 (900)	5,160 (710)	ヌノメアサリ(一対)出土。 マダラ椎骨の出土数が一番多い。
3層	土層	褐色 (10Y R $\frac{3}{4}$)	砂壤土	32,800 (1,800)	27,170 (1,440)	エゾチヂミボラ多い。
4層	混土貝層	暗褐色 (10Y R $\frac{3}{4}$)	砂壤土	5,730 (600)	4,690 (510)	エゾアワビ多い。 ムラサキインコガイの出土が一番少ない。
5層	混貝土層	暗褐色土 (10Y R $\frac{3}{3}$)	シルト質砂壤土	14,700 (900)	12,230 (770)	コベルトフネガイ(一対)出土。魚骨が1点も出土していない。レイシガイ2点出土。
6層	混貝土層	暗褐色 (10Y R $\frac{3}{4}$)	シルト質砂壤土	11,100 (1,200)	9,025 (930)	ウニ多。マダラの耳石(2点)出土。
7層	混貝土層	褐色 (10Y R $\frac{3}{4}$)	シルト質砂壤土	7,800 (600)	6,900 (500)	ウニ多。魚骨が1点も出土していない。
8層	混貝土層	褐色 (10Y R $\frac{3}{4}$)	砂壤土	5,900 (600)	4,790 (480)	

※総体積・総重量中、()内は各袋300ccずつのサンプル



第22図 下在家II遺跡貝ブロック

種名		層名								
		1層	2層	3層	4層	5層	6層	7層	8層	
軟 体	エゾアワビ	2 (1)	4	1 (1)	27 (16)	3 (1)	2 (2)	6 (1)	4 (1)	
	ベッコウガサガイ	2	1							
	マツバガイ		1							
	ユキノカサガイ	5	1		22		3		2	
	アオガイ	13	6	14	5	22	6	12	9	
	シロガイ	6					1			
	クボガイ	5	5	7	2	1	2	6		
	コシダカガンガラ	5		2	2	3	6	1	3	
	タマキビ	38	13	24	1	9	8	4	10	
	レイシガイ				2		1			
	チヂミボラ		1	1		1			1	
	動 物	エゾチヂミボラ			8以上					1以上
陸産マイマイ類		(+)	+	+	+	+	+	+	+	
ホタテガイ ^R _L									0 1 ①	
コベルトフネガイ ^R _L				0 1 ①		1 1 ①				
エゾイガイ ^R _L		22 28 ②③	9 11 ①①	8 6 ⑧	18 13 ⑮	10 5 ⑩	24 17 ②④	11 10 ⑪	21 13 ②①	
ムラサキインコガイ ^R _L		353 347 ③③	115 125 ①②⑤	136 152 ①②	84 88 ⑧⑧	150 135 ①⑤①	141 125 ①④①	95 79 ⑨⑤	132 128 ①③②	
ヌノメアサリ ^R _L		1 0 ①	1 1 ①				1 1 ①			
節足動物		ブジツボ科	(+)	+	+	+	+	+	+	
棘皮動物		ウニ類	+	+	+	+	+	(+)	(+)	+

第1表 軟体・節足・棘皮動物出土数一覧表

※①()内は破損品数

②+は出土有り、(+は出土量多し

③二枚貝類については、左・右殻に分け数の多い方をとったため、最少個体数となる。

(cm) ~2.0	2.1~3.0	3.1~4.0	4.1~5.0	5.1~6.0	6.1~7.0	7.1~8.0	8.1~9.0	9.1~10.0	10.1~11.0	11.1~
(個) 0	2	3	7	4	3	3	1	0	1	0

第2表 エゾアワビ最大殻長分布数表

0~0.5(cm)	0.6~1.0	1.1~1.5	1.6~2.0	2.1~2.5	2.6~3.0	3.1~3.5	3.6~4.0	4.1~4.5	4.6~
62 (個)	67	69	60	103	270	352	145	22	0

第3表 ムラサキインコガイ最大長分布数表

種名	部位	層名	1 層	2 層	3 層	4 層	5 層	6 層	7 層	8 層
サメ類	椎骨		1							
カサゴ科	椎骨				1			1		
アイナメ	後側頭骨		1 (R)							
	椎骨			1	1	1				
マダラ	前上顎骨			1 (R)						
	耳石							2		
	椎骨		8	9	2	2		5		1

第4表 魚骨出土数表

貝ブロックから出土した貝類は、まぎれ込んだと考えられる陸産マイマイ類を除けば、腹足類（巻貝）12種、二枚貝類5種である。単純に数量的にみれば、ムラサキインコガイ、エゾイガイ、エゾアワビなどが目につくが、それにも増してウニ類（ムラサキウニ、バフンウニの2種がある）の出土量が多い。これらのものは食用のため、また、何らかの目的のため捕獲され、投棄されたものと考えられる。

貝類

出土数を層毎に見て行くと、エゾアワビは、中間の層である4層に27個と、飛び抜けて多くあとは、数個程度と極端に少なくなる。エゾイガイは、全ての層から同程度数の出土だが、1・6・8層が比較的多い。ムラサキインコガイは、貝類の中では出土数・量が最も多かった。1層が多量で4・7層が少量である。特に6層においては塊状になって出土した。

比較的、完形品の多いエゾアワビ、ムラサキインコガイについて、その最大殻長を見れば、エゾアワビは、3.1~6.0cmまでのものが58.3%を占め小型のものが多い。ムラサキインコガイは、2.6~4.0cmまでのもので67%を占めている。

次に、量的には少ないが魚類では、サメ類、カサゴ科、アイナメ、マダラの4種が出土している。部位的には椎骨がほとんどで、種別では圧倒的にマダラが多い。層的には、1・2・6層からの出土が多く、7層からは全く出土しない。5層からは、破損し、種同定不能の椎骨が何点か出土している。また、アイナメの後側頭骨以外は、全て焼けたものである。

魚類

3. 調査のまとめ

下在家Ⅱ遺跡の発掘調査の内容は、以上の通りであった。土壌跡については、その性格・機能については不明のため、以下、貝ブロックを中心に若干の考察を加え、まとめとする。

貝ブロック

貝ブロックは、本文中で記した通り第5号土壌跡埋没過程において形成されたものである。当遺跡を含む崎山地区の海岸は、急崖をなし岩礁地帯が続いており、本貝ブロックの出土遺存体の構成種にも反映されている。内容を細かく見ていくと、主体をなしているのはムラサキインコガイとウニ類である。ムラサキインコガイは、エゾイガイと共に潮間帯の岩礁に固着し、密集し大群落を作るが、エゾイガイよりも上部に生息するもので、一年中捕獲できる。エゾイガイよりも肉質量の少ないムラサキインコガイを中心に採取してきている理由の一つかもしれない。エゾアワビは、小型のものが多く（3寸3分(10cm)以下の小型のものは現在では捕獲禁止となっている。）最小のものでは、殻長2.4cmのものまで採っており、採集法を考えれば殻自体には、穴などはあいてなく、突いて取ったものではない。また現在のように船上からアワビカギを使い採獲したものとは考えられない。海中にもぐって捕獲したものと考えられる。

またクボガイ、コシダカガンガラなどの他、タマキビなどの極小巻貝も含まれるが、数量的に見ても、極小な事からも、これらを食用目的のためにはなく、ムラサキインコガイ、エゾアワビ、ウニ等を主目的に捕獲して来たものと考えられる。

魚類についてみると、マダラの出土が多い。マダラは冬魚であり、貝ブロックの季節的な形成時期を考える上では留意しなければならない。

貝ブロックの形成時期については、貝ブロック、第5号土壌跡内、及び周囲からも、手がかりとなるような遺物が出土していないため、不明である。鉄製の釣針自体は、平安時代の貝層から出土している例（陸前高田市の中沢浜貝塚から3点出土している。（註1））もあり、一概に現代に近い新しい時期のものとも言えない。

最近、縄文時代の貝塚以外に、古代（平安時代）から近世の貝層をともなう遺構などの発見が知られるようになってきたが（註2）、今後、このような事例は増えていくものと考えられる。当然、これらは、社会的にも文化的にも、また、技術的にも縄文時代の貝塚とは全く異った形成状況であり、今後、増えていこうこれらには注目していかなければならないと思う。

下在家Ⅱ遺跡の貝ブロックの形成時期は、結局不明であったが、今後、同様な資料の発見をまっへの検討課題としたい。

〔註1〕 佐藤正彦 「中沢浜貝塚発掘調査概報 III」 陸前高田市教育委員会 1987年

〔註2〕 平安時代の貝層としては、宮古市内においても、昭和61年度に調査された、磯鶴館山遺跡から、貝層を含む3基の上層跡が検出している（未報告）。これらは、主に、イガイ、エゾイソシジミ、コタマガイなどを主体としたもので、少量ではあるが、獣魚骨、炭化米なども出土している。
また、大槌町や久慈市内でも平安時代の貝層を含む遺構が発見されている。

V 千徳城遺跡群（堀合館）

1. 千徳城遺跡群について

千徳城遺跡群は千徳城・千徳古城・堀合館の中世城館跡と縄文時代～平安時代の集落跡などで構成される複合遺跡である。

千徳城遺跡群は北側を近内川、西側を神田沢、そして南側、東側を閉伊川で囲まれた丘陵上（千徳丘陵の一部）に立地しており、近内、岩船方面の玄関口として、また花原市方面と宮古・鉾ヶ崎をつなぐ要所として、更には閉伊川対岸の根城、田鎖城、松山館、小山田館の諸城も指呼の間に望まれる軍事上の重要地点であったものと思われる。

千徳城はやや変形の五角形を呈する主郭とその南側に位置する副郭、北側に位置する二の郭、三の郭およびこれらを圍繞する帯郭や、周囲の尾根上に構築された砦や平場（小規模な郭）などで構成されている。おそらく創建時は主郭、副郭、帯郭程度の小規模なものであったと思われ、これに二の郭、三の郭などが順次つき足されて、最後には千徳城遺跡群の大半を占める大規模なものとなった様である（註1）。

千徳城

城主については諸説があるが、田村氏の指摘の様に、鎌倉幕府から笠間、鉾ヶ崎の地頭職（元享四年（1324）『鎌倉幕付裁決状』）を認められ、はじめ笠間の館に拠っていた河北閉伊氏であったと思われ、築城年代も田村氏の想定の様に対岸の田鎖城築城の関連からほぼ14世紀末とみて大過ないと思われる（註2）。しかし、これが天正二十年（1592）の『南部大膳大夫分国之内諸城破却共書上之事』に「千徳 山城 破 一戸孫三郎持分 庸之供 留守 甲斐守」とあり、城主が一戸氏（所謂一戸系千徳氏？）に交代しているが、別な氏族との交代があったのかあるいは同一氏族内での改姓であるのか判然としない。

千徳古城は善勝寺の裏山にあたり堀合館と千徳城背後の砦とのほぼ中間に位置する。ひょうたん形に連なった二つの郭に一部帯郭をめぐらしただけの単純な構造の館である。館の西側には館神と思われる黒田大権現の小祠がある。館主、築城年代ともに不明であるが、おそらくは千徳城以前のものであろう。

千徳古城

堀合館は千徳城遺跡群の南端に位置する。主郭はほぼ家形の五角形をした単郭で、この下に帯郭がめぐる。基部は二重の堀り切りで分断し、千徳古城方面との連絡を断っている。主郭の東、西に延びる尾根上にも平場が構築されており、特に西側のものには平場の下に帯郭が伴う。主郭の南西部は堀合団地造成時に破壊され現状をとどめていない。

堀合館

この館も館主、築城時期等不明であるが、千徳城以前のもと思われる。

2. 調査経過と概要

2-1(1) 調査経過および方法

調査区の現状は北半が畑で南半が盛土されていたため、北半部を中心にトレンチによる試掘調査を行った。試掘の結果、堀合館構築時のものと思われる整地地業の跡とその下層に耕作痕（畑）を検出したが、整地地業の跡は調査区の南半に延びることが判明したため、この精査を目的として南半部を全面的に本調査することとした。盛土かなり厚かったため、原因者の協力により重機を導入して排土を行った。

2-1(2) 調査の概要

今回の調査の結果検出した遺構、遺物の概要は次のとおりである。

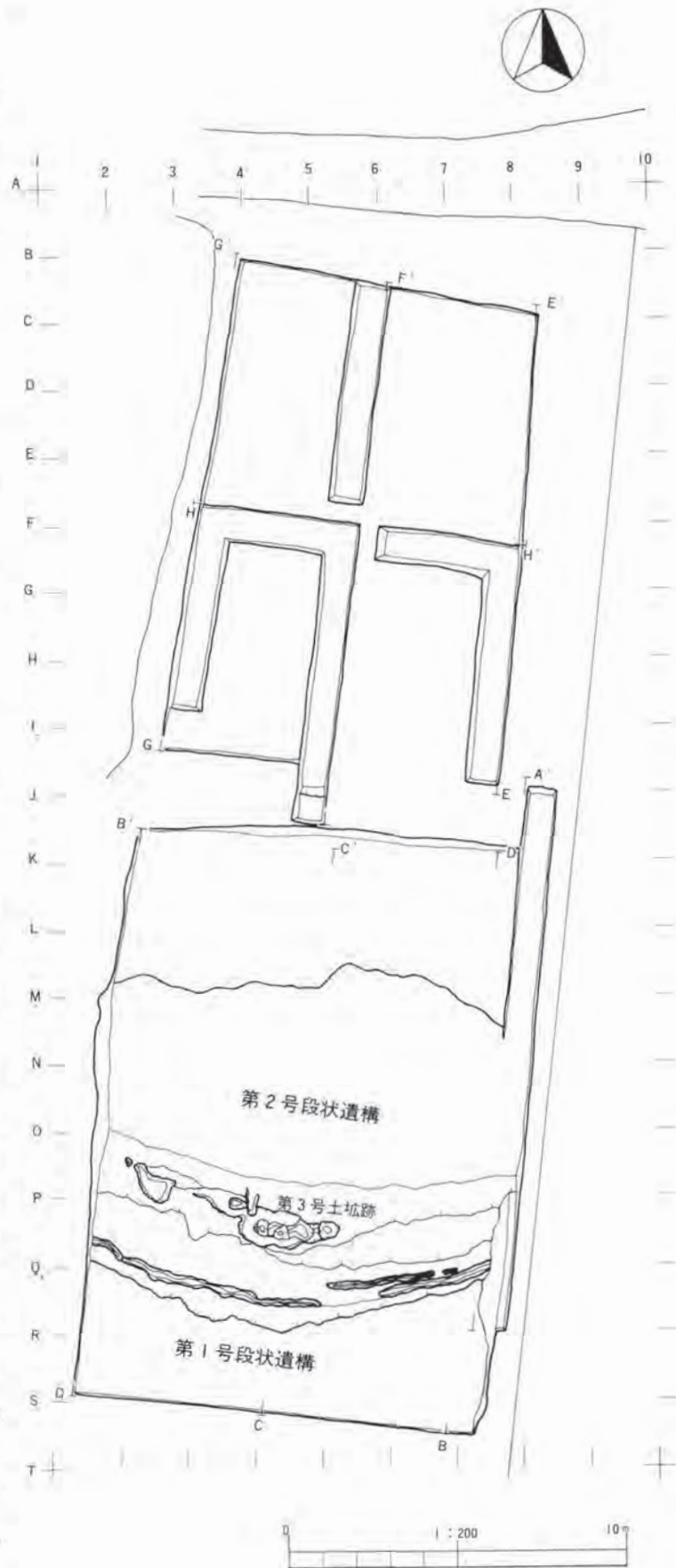
堀合館に伴うと思われる段状遺構2基および整地地業、土壙跡1基と館以前の耕作痕(畑)。また、整地層からは築城時もしくはそれ以前の獣骨(ウシ、ウマ)が伴出している。整地層や遺構埋土などから須恵器や土師器の破片が出土しており、付近に古代の遺構の存在が予想された。

3. 検出遺構と遺物

3-1) 検出遺構

第1号段状遺構 調査区南端に検出した。第2号段状遺構および第3号土壙跡より新しい。壁の立ち上りはややなだらかで掘込みも浅い。埋土は7層に細分されるが、A4層とA6層は地山(真砂土)を基本土とし、他の層はやや粘性のある褐色土を基本土とし、真砂土や暗褐色土を混入する。いずれも自然堆積と思われる。

第2号段状遺構 第1号段状遺構の北に位置し、第1号段状遺構より古く第3号土壙跡より新しい。壁の立ち上りはややなだらかで、検出面からの深さは約1mを計る。底面は平坦であるが北側より南側がやや高い。埋土はA層、B層、C層、D層に大別される。D層は第2号段状遺構の使用時もしくは廃棄直後の堆積土で厚さ10cm程のシルト質土層である。C層は第1号段状遺構構築時の整地層で暗褐色土を基本土とし黒褐色土や真砂土のブロックを多く含む。B層も第1号段状遺構構築時の整地層で褐色の砂質土を基本土とし暗褐色土や真砂土のブロックを多く含む。A層も第1号段状遺構構築時の整地



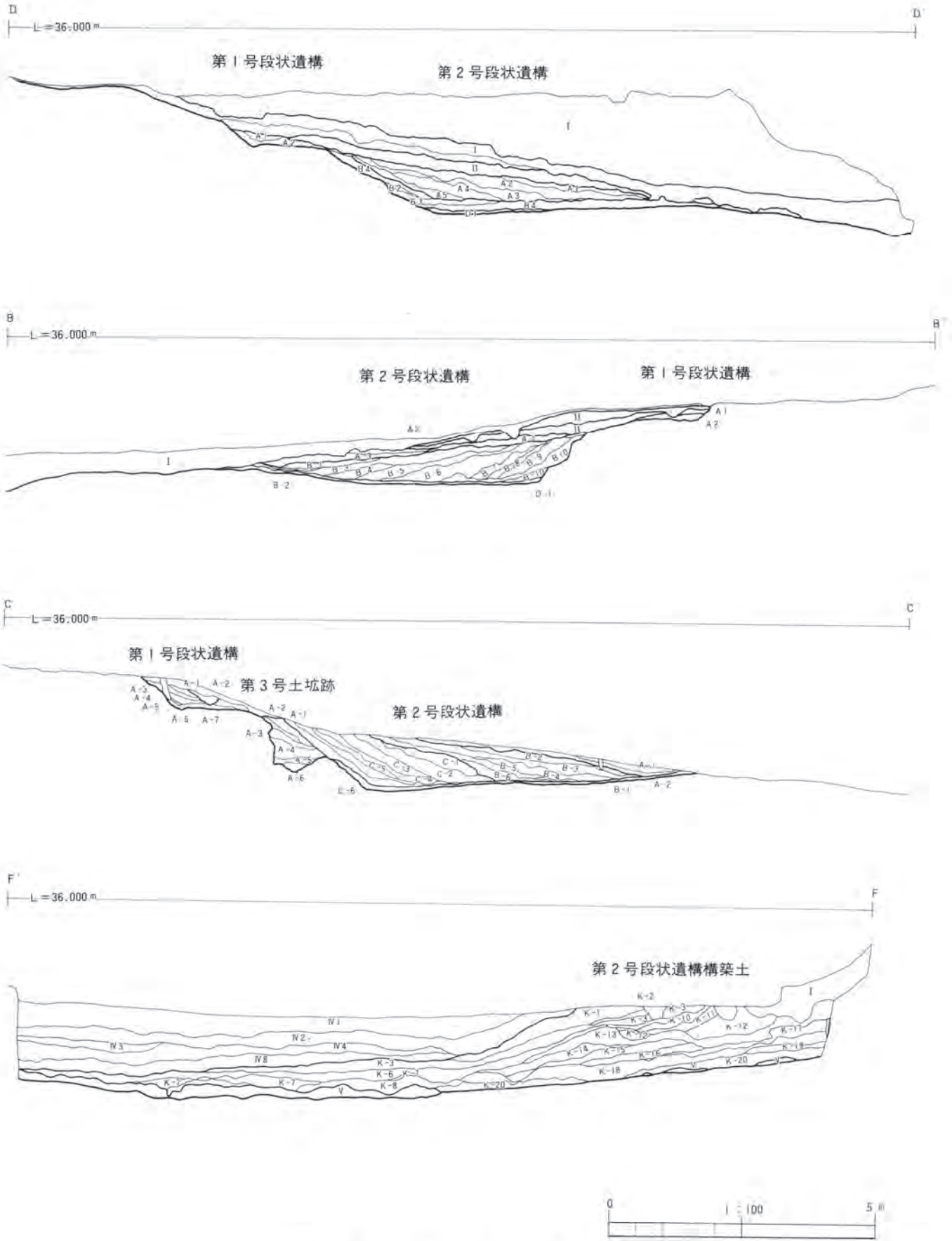
第23図 千徳城遺跡群(堀合館)調査区全体図



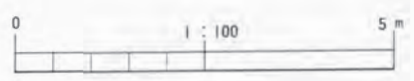
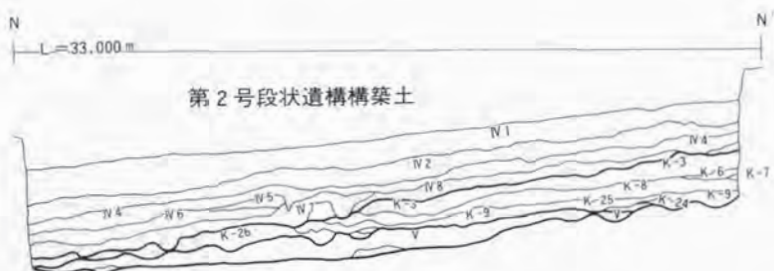
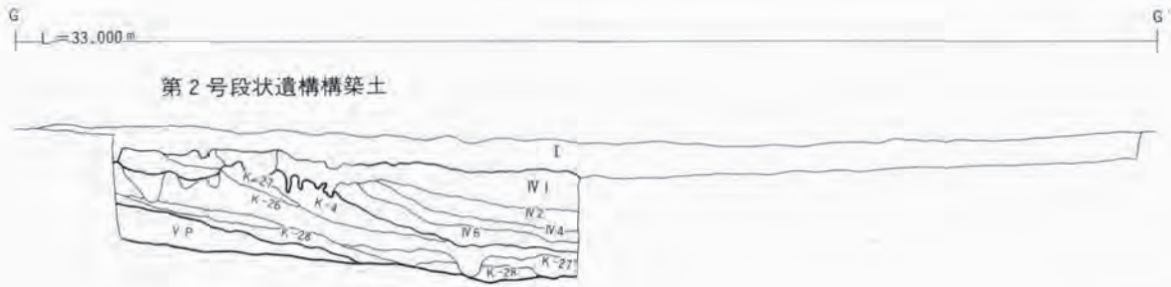
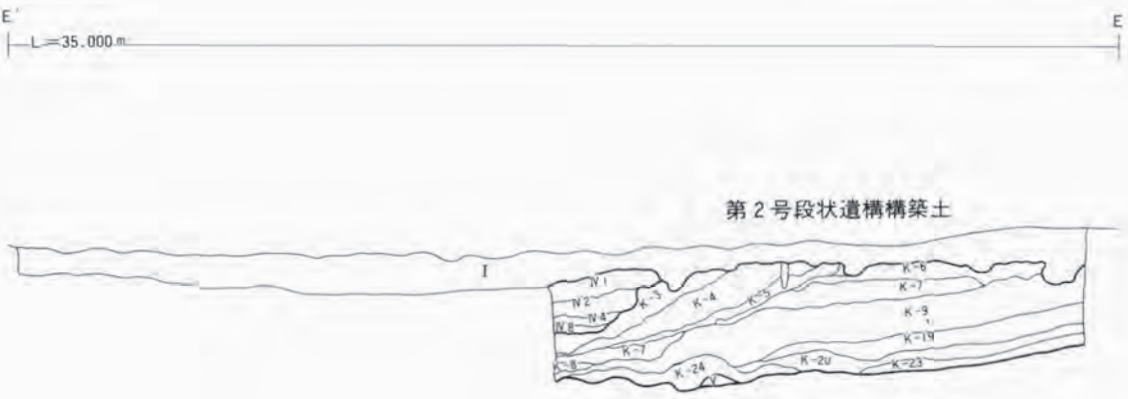
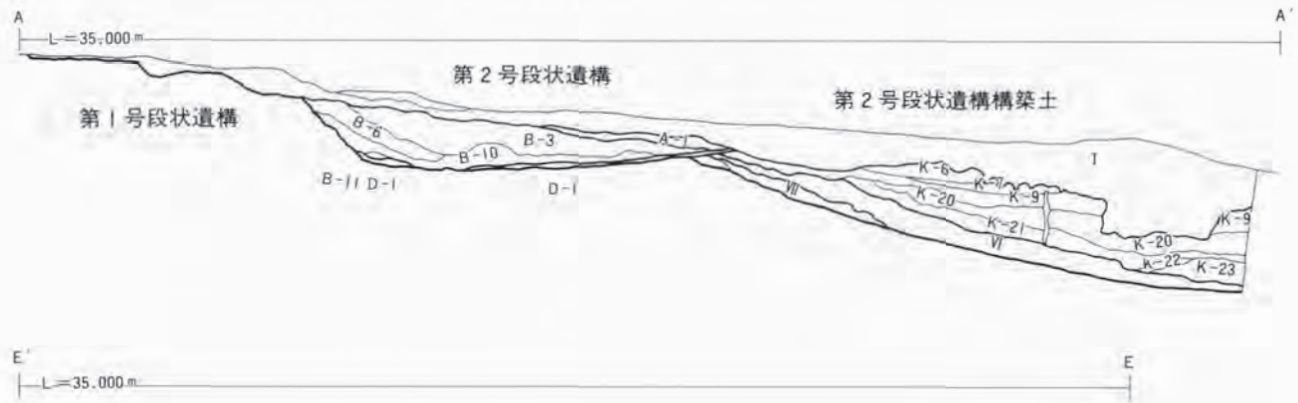
第24図 千徳城遺跡群と周辺地形図



第25図 第1号段状遺構、第2号段状遺構、第3号土坛跡平面図



第26図 千徳城遺跡群（堀合館）遺構断面



第27図 土層断面図(2)

層でやや明るい褐色土を基本土とし、にぶい黄褐色土塊などを含む。特にA2層は粘性が強い。A層上面は第1号段状遺構の底面に連続する面かと思われる。

K層は第2号段状遺構構築時の整地層で真砂土に暗褐色土を混入する層や黒褐色土に褐色粘土を混入する層などが不規則に堆積する。K層の下面（V層上面）には第2号段状遺構以前の耕作痕（畑）を検出している。

第3号土壇跡 第2号段状遺構の壁に掘り込まれた不整形の土壇で第2号段状遺構より古い。規模は東西約3.0m、南北約1.1m、深さ約1.0mを計る。埋土はいずれも褐色土～黄褐色土を基本土とし混入土を比較的多く含む。

3-2) 出土遺物

遺構から出土した遺物は前述したように古代の土器片のみであり、中世に伴う陶磁器類、古銭、鉄器等は全く出土していない。古代の土器片は大半が小片であり図示できなかった。

また第2号段状遺構構築土のK層からはややまとまって獣骨が出土している。いずれも保存状態が悪く、同定できたものはウマ (*Equus caballus*) の外頭蓋底口蓋部 (R) 及び遊離歯 (臼歯) とウシ (*Bos taurus*) の下顎骨 (L) のみである。これ以外に未同定の四肢骨があるが、いずれもウマやウシ程度の大型獣のものである。

4. 調査のまとめ

今回の調査で検出した遺構は堀合館に伴うと思われるが、具体的な年代を推定することは伴出遺物が出土していないので不可能である。段状遺構については、昭和59年度～昭和61年度に調査を実施した磯鷄館山遺跡に類例がある。これは、空堀りの下位斜面に構築されるもので、比較的長い距離を連続するものと短く分断されるものの2者が認められた。堀合館の場合も、主郭の北と東に現存する帯郭が空堀りに相当するとすれば、同様に下位斜面に段状遺構が構築されていたことになる。調査区の南尾根の南斜面にも同様な遺構が確認されており、主郭の北～東の斜面にも連続している可能性がある。

ところで、この性格であるが、第1号段状遺構は比較的規模が小さく犬走りの機能が想定されるとしても、第2号段状遺構は遺構下の傾斜がゆるく、比高差もあまりないので防御の施設としてはあまり有効とは思われない。また、柱穴等の付属施設も検出されないため、この段状遺構の性格も現時点では不明瞭と言わざるを得ない。

最後に第2号段状遺構構築土層から出土した獣骨であるが、これらは散乱状態で出土したものであり、遺構を構築する際に埋葬してあった牛馬を掘り起したもののらしい。おそらくは堀合館築城時もしくはそれ以前に伴うものであるが、堀合館を築城する際に牛馬を使役した可能性も十分指摘できるものと思われる。

SUMMARY

This is a report on excavations and findings of three sites-Aozaru I, ShimozaïkeII, Horiai-tate (a portion of the sites of the castle grounds in Sentoku) in Miyako, Iwate Prefecture.

Miyako City is centrally located in the Sanriku Coastal area, Iwate Pre. We have so far found about 400 sites in the city by distribution research, which are of course of valuable inheritance to us. We think it best to preserve these sites and hand them down to posterity. But recently, with more land developments, they have begun to be destroyed.

As destruction of the above mentioned three sites, Aozaru I, ShimozaïkeII, and Horiai-tate, was inevitable with the development planned for that area, we undertook excavations before they were bulldozed.

Aozaru I is located in Sentoku, west of Miyako and on the Sentoku Hill 50-60 meters above sea-level. We unearthed pit-dwellings, possible fireplace remains used for iron manufacturing. They are remains of a village of Heian Period and valuable for the light they shed on people's living and social circumstance of that period.

ShimozaïkeII is located at Kuwagasaki, north of Miyako, on the edge of tongue-shaped plateau 90-100 meters above sea-level. It is surrounded by valley plain, which is eroded on three sides by small rivers. Although remains and artifacts were fewer than we had expected, we discovered five pits whose age is unknown. One of them has a shell-layer. We brought it back and put it through 1 mm-mesh screen with water. The shell-layer contained mostly *Murasakiinkogai* (*Septifer virgatus*), *Ezoawabi* (*Haliotis discus hanndi* Ino), *Ezoigai* (*Grenomytil grayanuds*), sea urchin, and small amount of fish bones, reflecting the fact that Sakiyama, where this site is found, has rocky coast that forms cliffs. We could not find any artifacts but an ironhook in the pits.

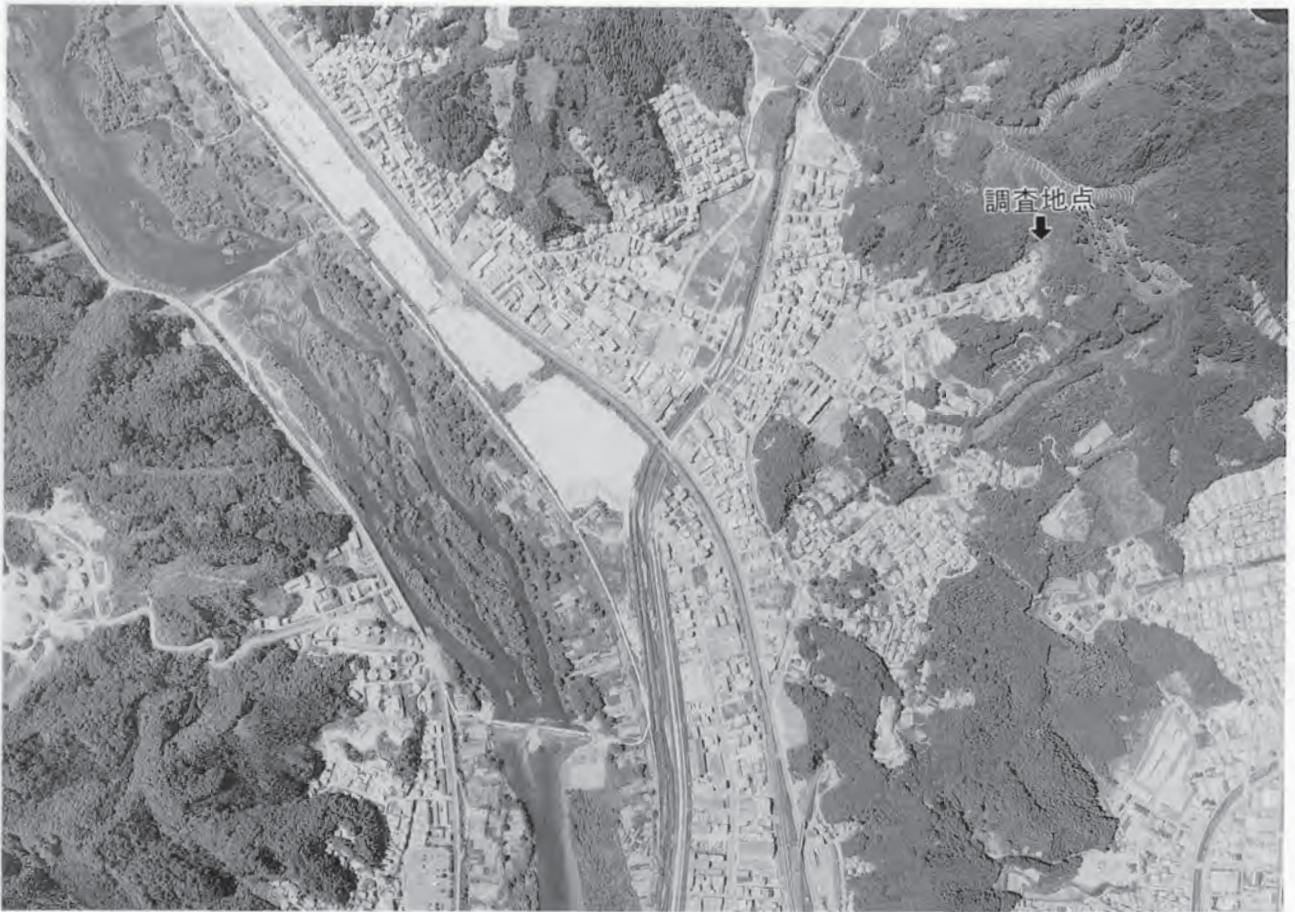
The group of castle ruins in Sentoku is located on the hill (a part of Sentoku Hill), west of Miyako, surrounded on the north side by Chikanai-gawa, on the west side by Kanda-zawa, on the south, and east side by Hei-gawa. They are sites composed of castles from the Medieval Period (Sentoku-jo, Sentoku-kojo, Horiai-tate) and remains of the settlement from the Jomon~Heian Period.

In the northwest of Horiai-tate we unearthed remains of two terraces, two leveled places, one pit, and remains of a cultivated field under the leveled place. The two terraces seem to have been fortifications or passages for soldiers. The leveled places were covered with the soil taken away from the slope to construct the terraces. The lower leveled place contained animal bones (cows, horses) dating back to the period of Horiai-tate or before that period.

We presume these remains to be of the Medieval Period, but, as we could not find any artifacts such as pottery, their age is not clear.

All of these remains are valuable data, bringing new insights into our ancestor's style of living. But there still is a lot of research to be done. For example, we have to compare the iron tool remains that are known to be Heian Period, with other similar remains found both within and outside the city. Then a chemical analysis of the finds must be made as well.

青猿 I 遺跡写真図版



長根・泉町・鴨崎遺跡群垂直写真



青猿 I 遺跡全景垂直写真

第2図版



青猿 I 遺跡近景



青猿 I 遺跡調査区 (D区)



青猿 I 遺跡調査区 (A区)



青猿 I 遺跡調査区 (B区)

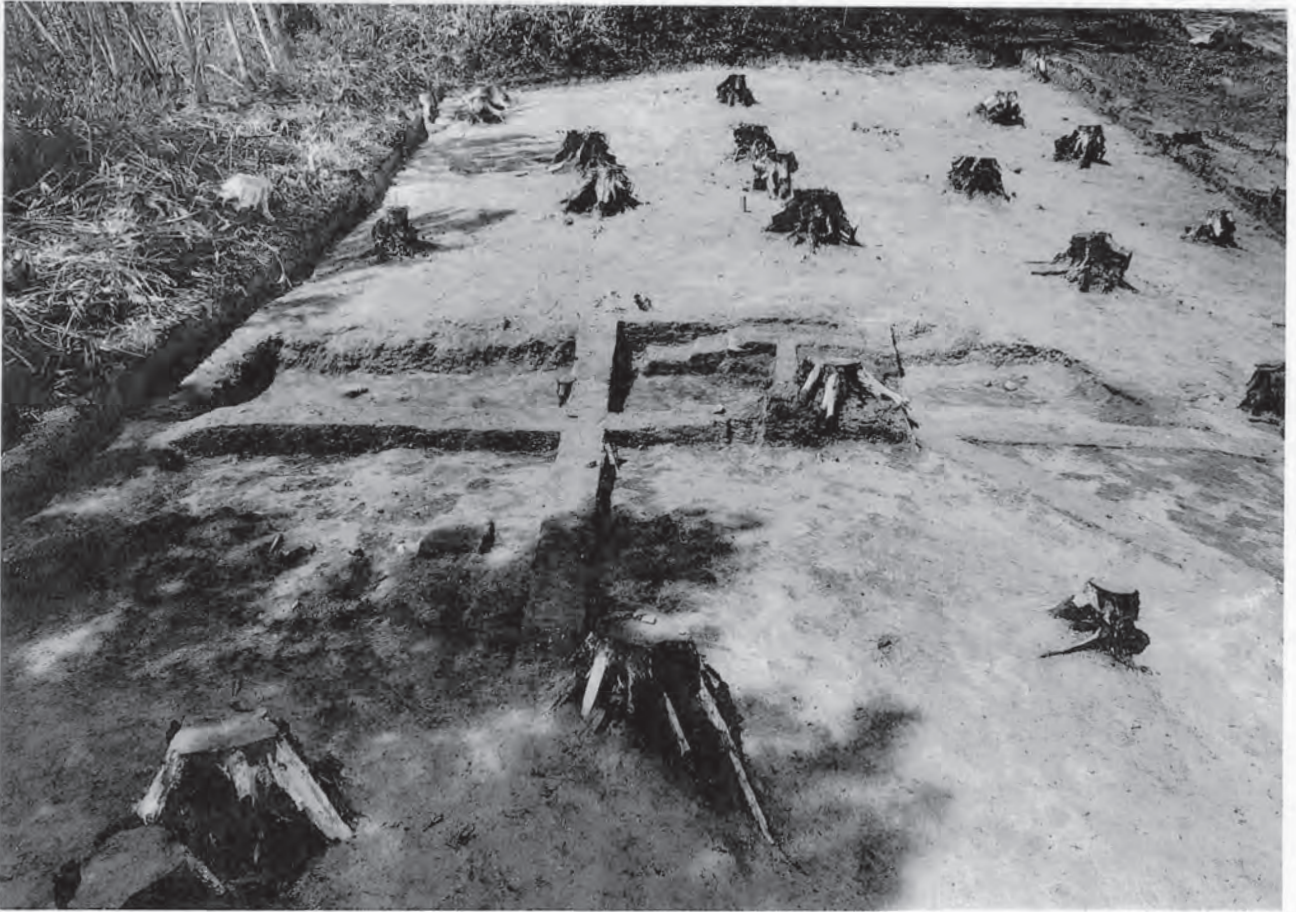
第4図版



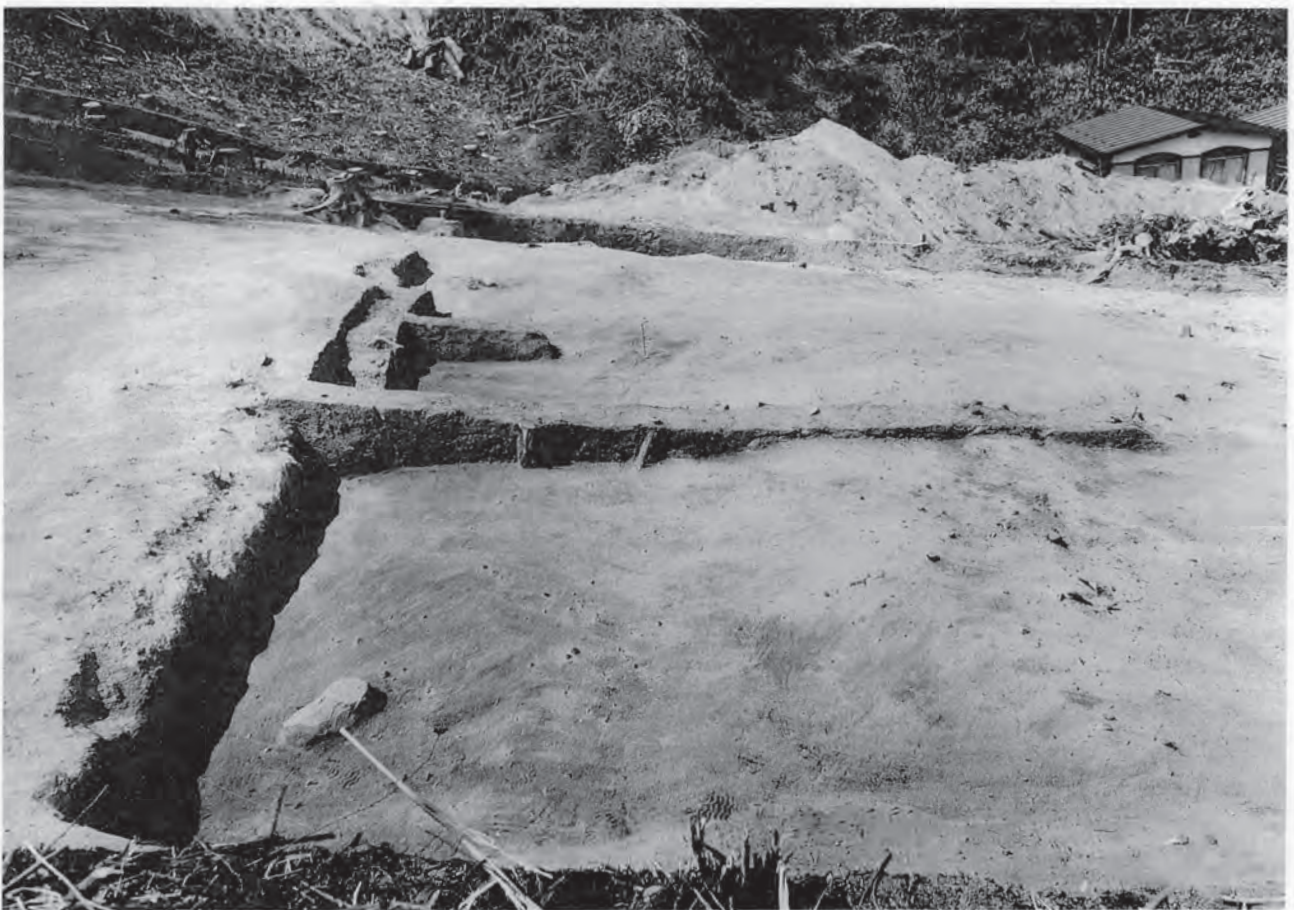
青猿 I 遺跡調査区 (G区)



青猿 I 遺跡調査区 (G区)



青猿 I 遺跡竪穴住居跡土層断面①



青猿 I 遺跡竪穴住居跡土層断面②

第6図版



青猿 I 遺跡 竪穴住居跡 カマド ①



青猿 I 遺跡 竪穴住居跡 カマド ②

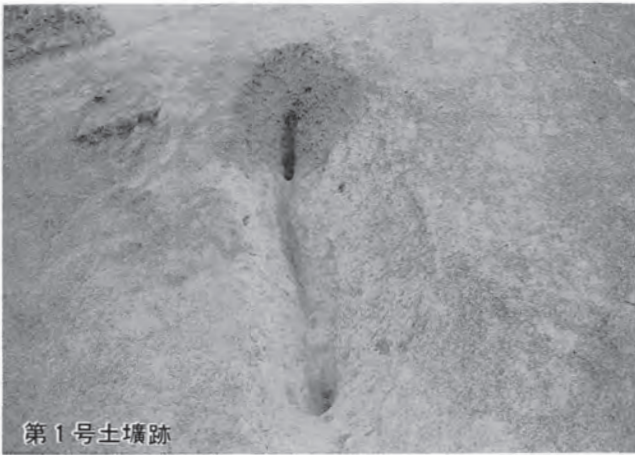


青猿 I 遺跡 竪穴住居跡 カマド③

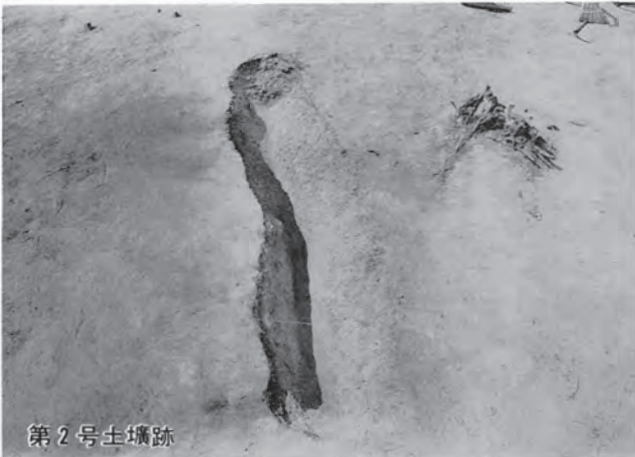


青猿 I 遺跡 竪穴住居跡

第8図版



第1号土壤跡



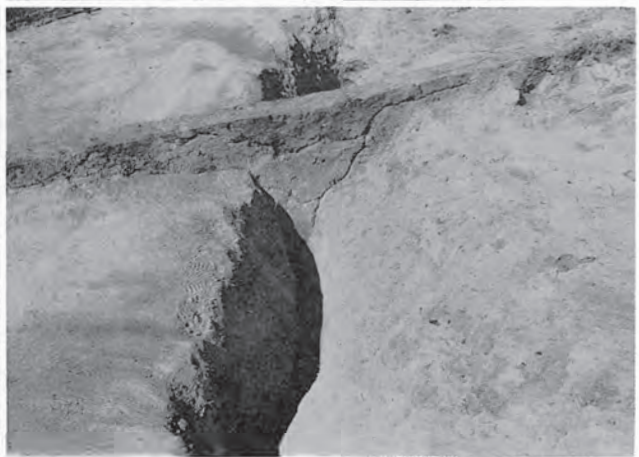
第2号土壤跡

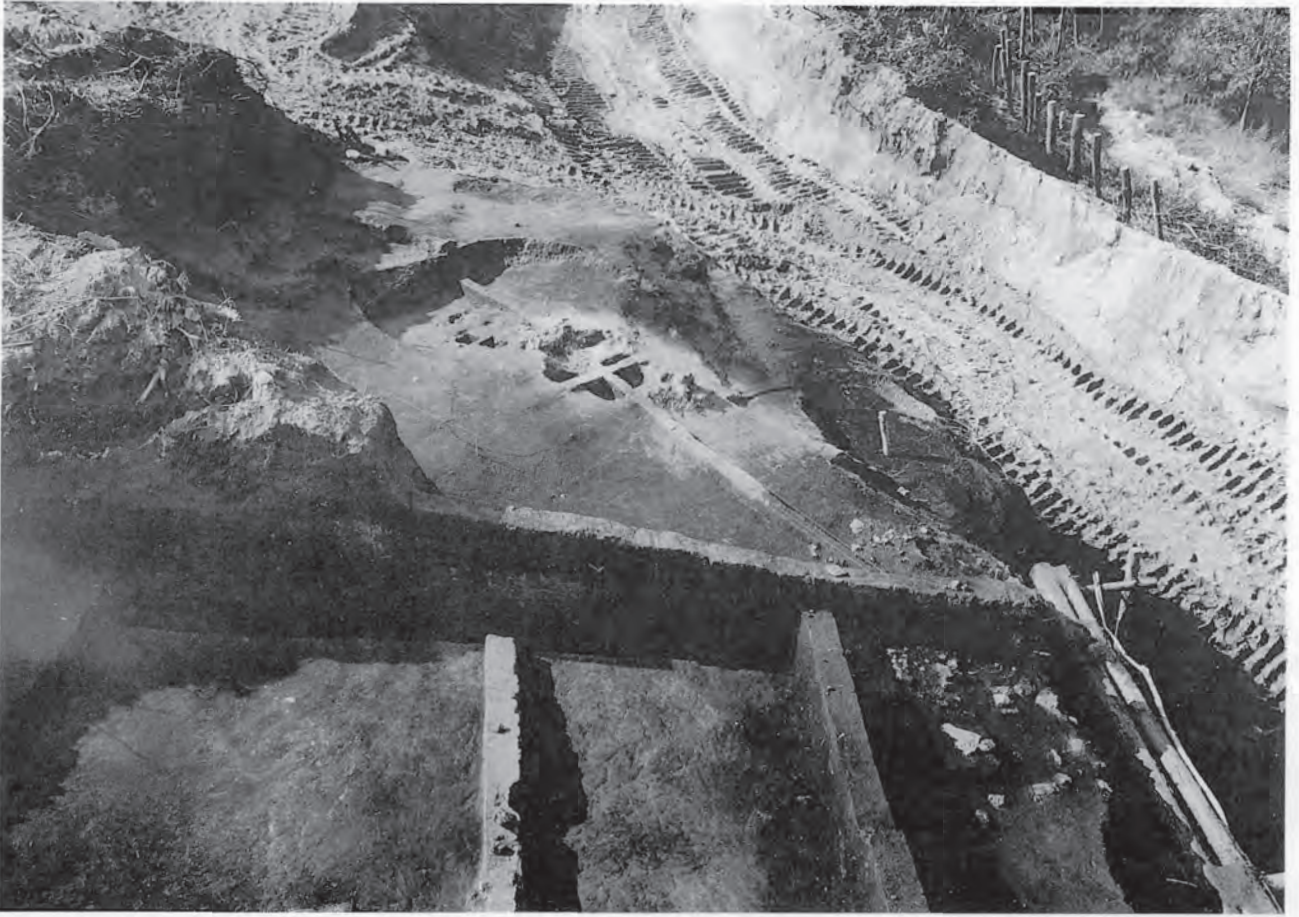


第3号土壤跡

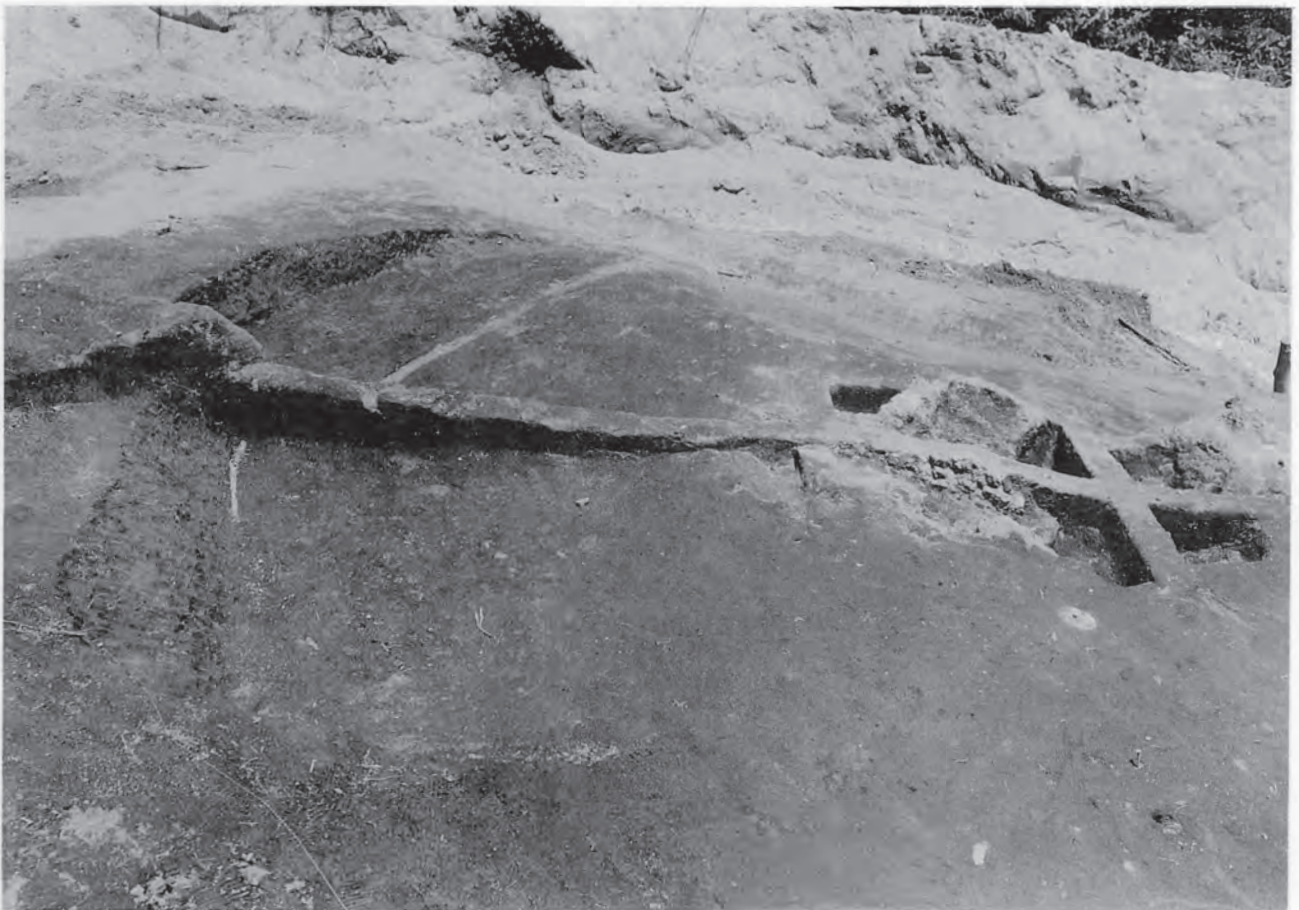


第4号土壤跡





青猿 I 遺跡鉄関連遺構全景



青猿 I 遺跡鉄関連遺構 (竖穴-炉本体)

第10図版



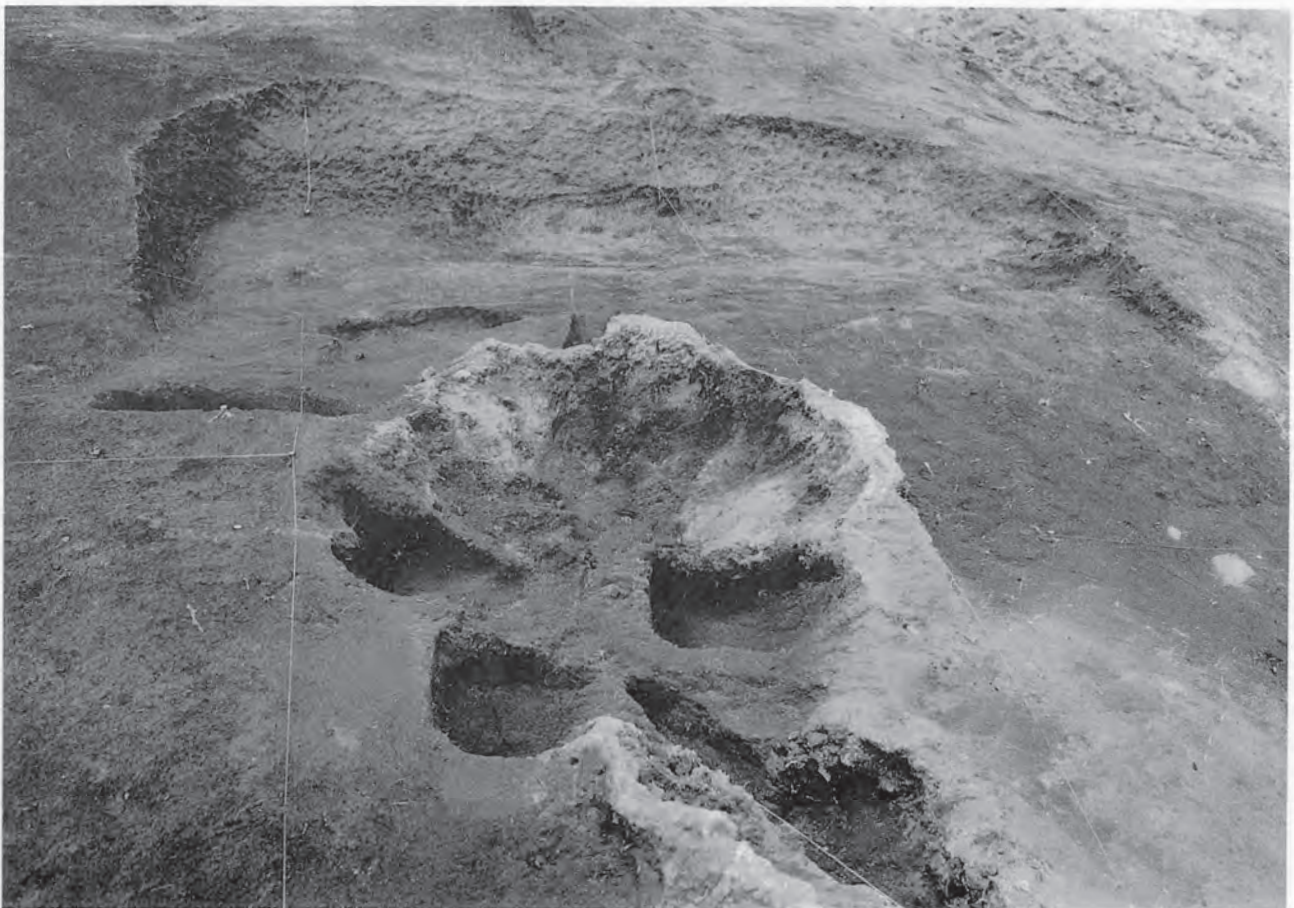
青猿 I 遺跡鉄関連遺構（竪穴～炉本体）



青猿 I 遺跡鉄関連遺構（炉本体）



青猿 I 遺跡鉄関連遺構（竪穴～炉本体～廃滓捨て場）



青猿 I 遺跡鉄関連遺構（竪穴～炉本体）

第12図版

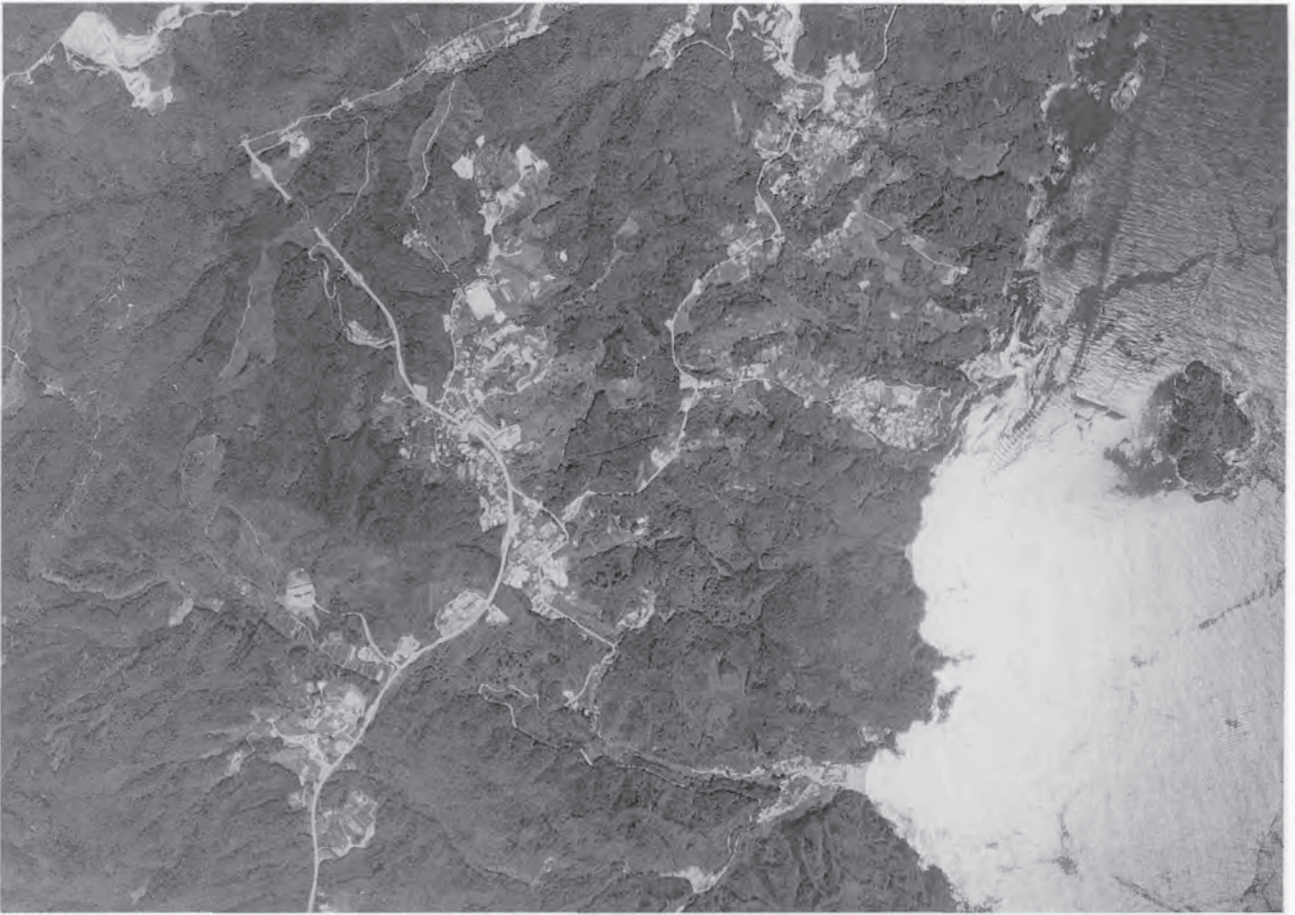


青猿 I 遺跡鉄関連遺構炉本体内出土鉄滓（碗型滓）



青猿 I 遺跡鉄関連遺構廃滓捨て場出土 羽口

下在家II 遺跡写真図版

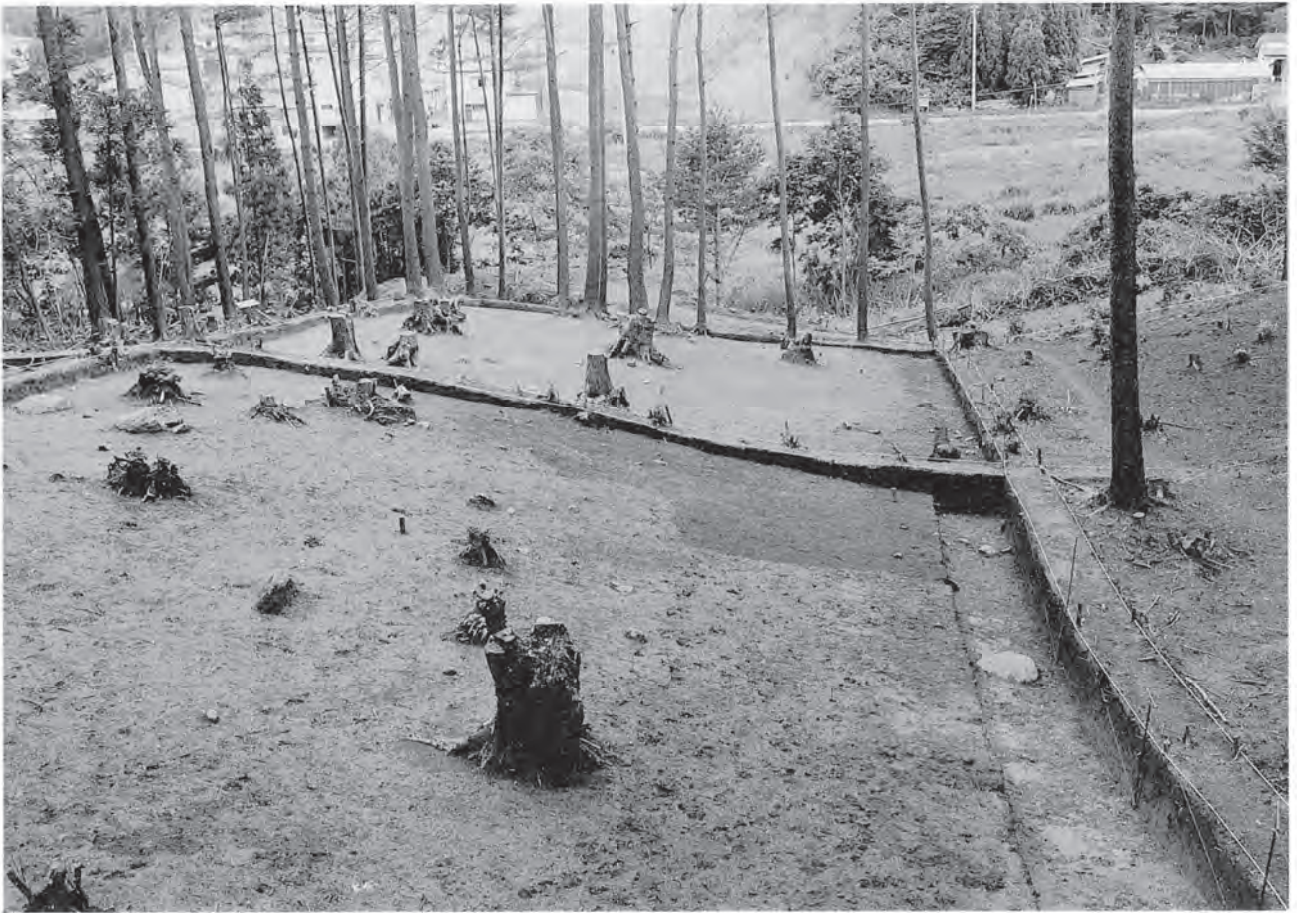


崎山遺跡群全景



下在家Ⅱ遺跡近景

第14図版



下在家Ⅱ遺跡調査区①



下在家Ⅱ遺跡調査区②



下在家II遺跡第5号土坑跡土層断面①



下在家II遺跡第5号土坑跡土層断面②

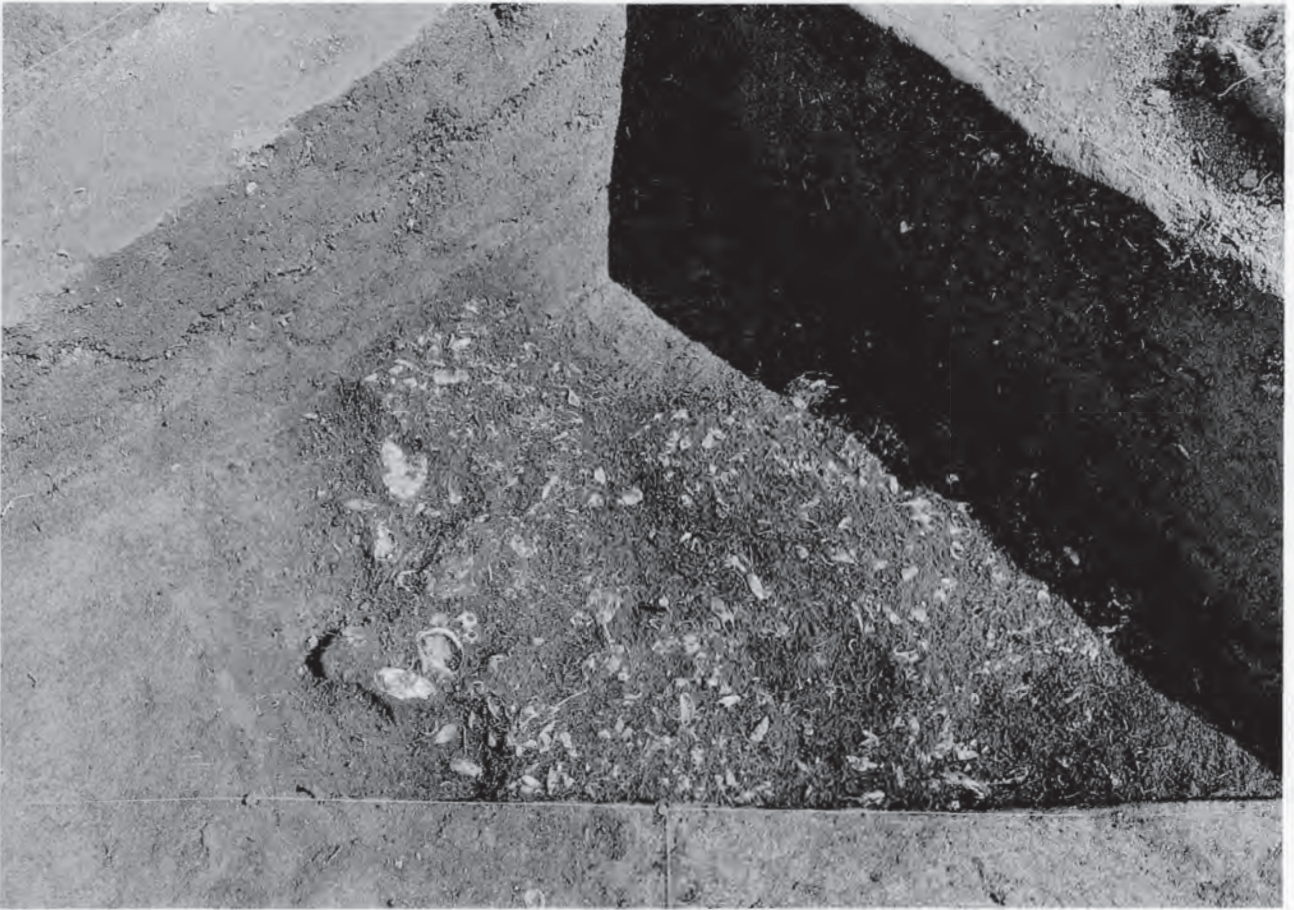
第16図版



下在家Ⅱ遺跡貝ブロック断面①



下在家Ⅱ遺跡貝ブロック断面②

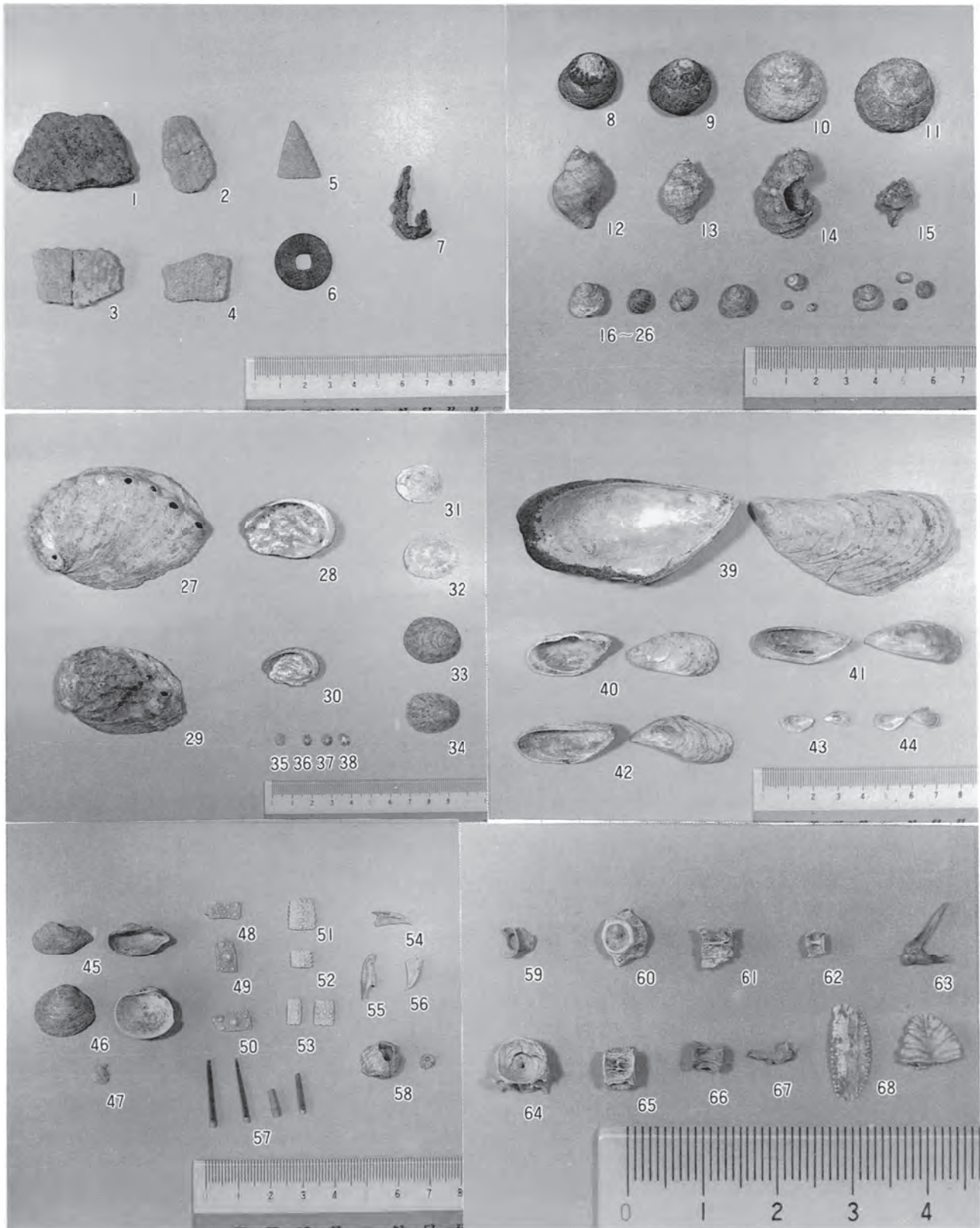


下在家Ⅱ遺跡貝ブロック①



下在家Ⅱ遺跡貝ブロック②

第18図版



下在家Ⅱ遺跡出土遺物

1~6. 遺構外出土遺物 (1~4. 縄文土器片 5. 石鏃 6. 寛永通宝)

7~68. 貝ブロック出土遺物 (7. 鉄製釣針 8・9. クボガイ 10・11. コシタカガンガラ 12・13. チチミボラ 14. エゾチチミボラ 15. レイシ

27~30. エゾアワビ 31・32. ユキノカサガイ 33・34. マツバガイ 35. シロガイ 36~38. アオガイ

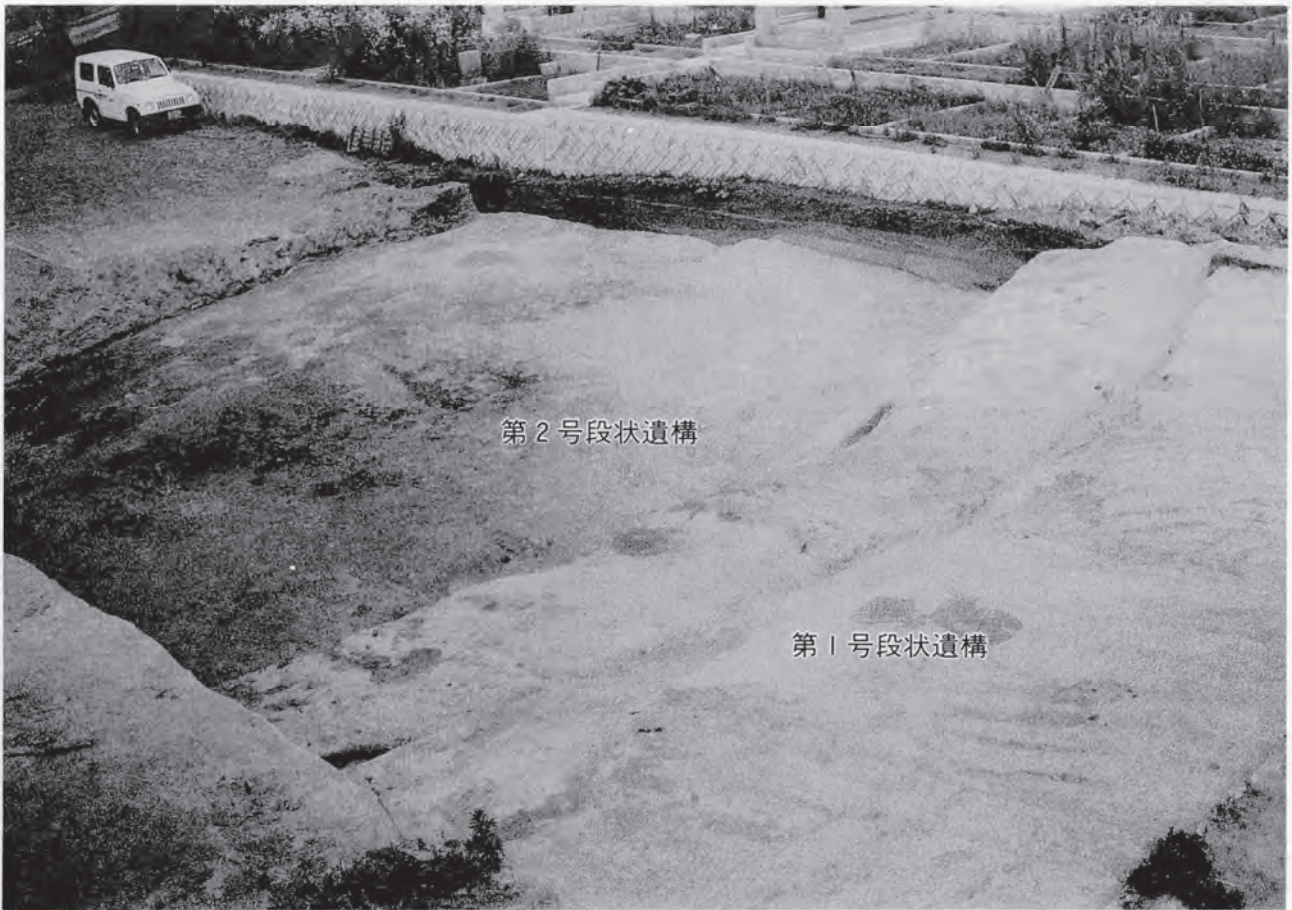
39~44. ムラサキウニコガイ 45. コベルトフネガイ 46. ヌノメアサリ 47. ホタテガイ 48~50. ムラサキウニ殻

51~53. バフンウニ殻 54~56. ウニ類口器 57. ウニ類棘 58. フジツボ 59. サメ類椎骨

60. カサゴ科稚骨 63. アイナメ後側頭骨(R) 64~66. マダラ椎骨

67. マダラ前上顎骨(R) 68. マダラ耳石

千徳城遺跡群（堀合館）写真図版



千徳城遺跡群（堀合館）調査区全景

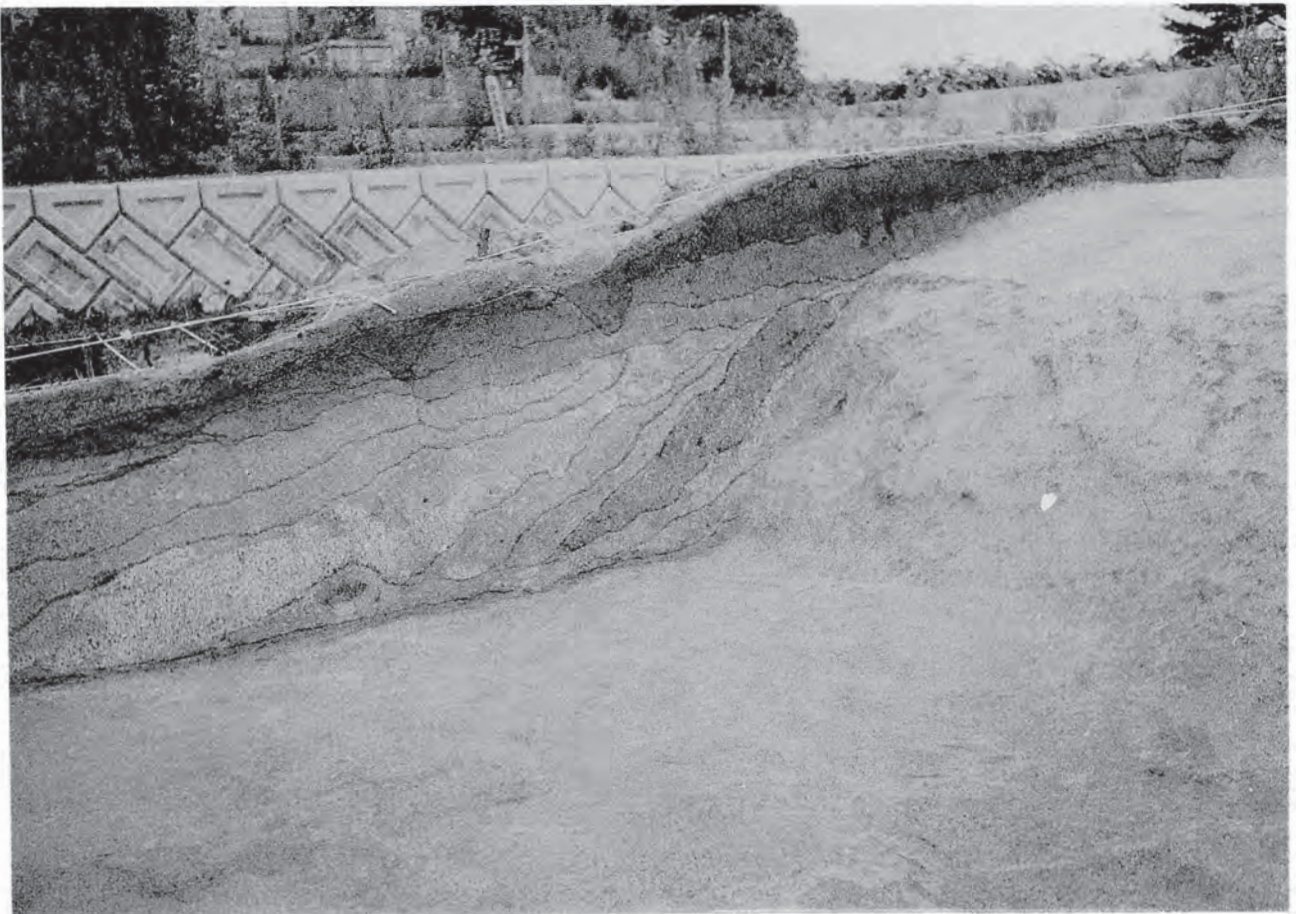


遺構全景

第20図版



第1号段状遺構、第2号段状遺構、第3号土坛跡堆積状況



第1号段状遺構、第2号段状遺構堆積状況



第2号段状遺構構築土堆積状況



ウシ下顎骨出土状況

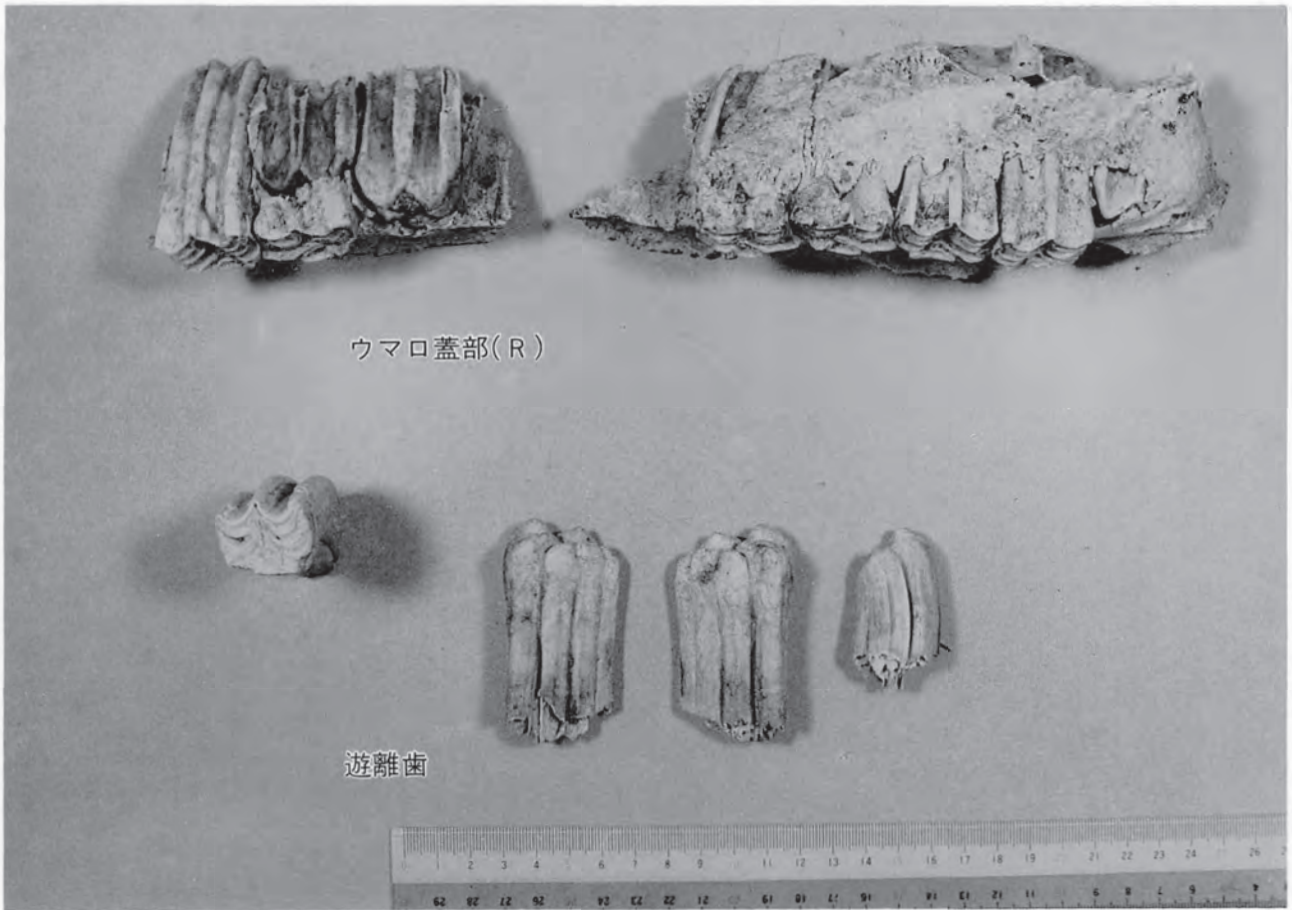
第22図版



獣骨出土状況



獣骨出土状況



ウマロ蓋部(R)

遊離歯

出土遺物 (獣骨)



ウシ下顎骨(L)

出土遺物 (獣骨)

—宮古市埋蔵文化財調査報告書14—

青猿 I 遺跡
下在家 II 遺跡
千徳城遺跡群(堀合館)

—昭和62年度発掘調査報告書—

1988.3

発行 宮古市教育委員会
〒027 岩手県宮古市新川町2番1号
TEL 0193 (62) 2111

印刷 株式会社文化印刷
〒027 岩手県宮古市大通2丁目5の2